大田区の埋蔵文化財　第 23 集

南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ　久ヶ原遺跡Ⅵ
発掘調査報告

２０１７

大田区教育委員会

大田区の埋蔵文化財　第 23 集

南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ　久ヶ原遺跡Ⅵ
発掘調査報告

２０１７

大田区教育委員会

はじめに

大田区が位置する場所は丘陵・谷戸・低地・河川など地形に富んでおり、人びとは、太古の昔からその多様な環境を生活に利用しながら日々の暮らしを営んできました。

その証拠として、大田区では先土器（旧石器）時代から江戸時代にいたるまで236箇所の遺跡（埋蔵文化財）が発見され、登録されています。これは都市化が進む中にあって、幸いにも昔からの地形が比較的保たれ、過去の生活の痕跡である遺跡が良好な状態で地中に残されていることを示しています。

大田区教育委員会では、様々な土地利用による開発事業で遺跡を現状のまま保存することが困難な場合、事業者や土地所有者のご協力のもとで工事前に発掘調査を実施しています。調査によって得られた遺跡の内容は、調査報告書にまとめ、記録として後世に伝えるとともに、調査の成果を各種事業で公開し、私たち祖先の生活や暮らしを知ることができるように活用しています。

本書は平成25年度及び26年度に行った南久が原二丁目4番横穴墓、久ヶ原遺跡の調査成果を収録しています。南久が原二丁目4番横穴墓は、東急池上線久が原駅に程近い住宅街から新たに発見された遺跡です。古墳時代の終わりから奈良時代にかけて、大田区内で盛んにつくられた古代人のお墓です。また、久ヶ原遺跡では、遺跡の北部で弥生時代後期の住居跡が発見され、集落の範囲と展開を考える上で貴重な調査となりました。

本報告書が研究資料として十分に活用され、また、地域の歴史的文化遺産に対して、皆様の深い関心とご理解を寄せていただく一助となることを願っています。

終わりに、日ごろより大田区の埋蔵文化財保護行政にご指導を賜っております文化財保護審議会委員の高橋龍三郎先生、ならびに発掘調査にご協力をいただきました事業者や土地所有者の方々に、改めて厚く御礼を申し上げます。

平成29年3月

大田区教育委員会
教育長　津村正純

例　　言

1　本書は、平成 25･26 年度に発掘調査された大田区内における南久が原二丁目４番横穴墓、久ヶ原遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した発掘調査は、下記の調査体制で実施した（所属はいずれも調査当時）。

南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ

１．南久が原二丁目４番地点の調査

a）調査目的　集合住宅建設に伴う事前の発掘調査

b）調査期間　平成 25 年５月 21 日から５月 28 日まで（本格調査）

c）調査面積　約 3.44 ㎡

d）調査主体　大田区教育委員会

e）調査担当者　伝田郁夫　門内政広（大田区立郷土博物館　文化財担当）

久ヶ原遺跡Ⅵ

１．久が原四丁目 23 番９号地点の調査

a）調査目的　個人住宅建設に伴う事前の発掘調査

b）調査期間　平成 26 年 11 月 10 日から 12 月５日まで（本格調査）

c）調査面積　約 58.36 ㎡

d）調査主体　大田区教育委員会

e）調査担当者　伝田郁夫　門内政広（大田区立郷土博物館　文化財担当）

f）調査受託機関　株式会社四門　担当：板垣　徹

3　本書は各調査地点の調査担当者及び調査受託機関の担当者が執筆し、本文の加筆及び編集は、伝田郁夫・門内政広（大田区教育委員会　大田図書館　文化財担当）が行った。

4　本書に収録した出土遺物と記録図面等は、大田区教育委員会　大田図書館　文化財担当が保管している。

5　本書に掲載した遺構・遺物等の図面縮尺は、各報告書に示した。

6　本書に掲載した遺跡の現地調査から本書の作成に至るまで、以下の方々及び機関からご指導及びご協力を賜った。記して感謝を申し上げます（順不同・敬称略）。

城倉正祥　草野潤平　青木　弘　竹野内恵太　ナワビ矢麻　川又隆一郎　渡邊　玲

石井友菜　小林和樹　根本　佑　早稲田大学文学部考古学コース

【追記】

大田区文化財保護審議会委員を務められていた亀井明徳先生（専修大学名誉教授）が、平成 27 年３月 23 日に急逝された。亀井先生は、我々に請われる度、発掘調査や出土遺物の資料調査、地中レーダー探査など、様々な現場に足繁く視察に赴かれ、調査方法や埋蔵文化財保護について、数々のご指導とご助言を戴いてきた。長年にわたって大田区の文化財保護へのご尽力に深謝するとともに、ここに哀悼の意を表します。

目　　次

はじめに
例　　言

南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ
１．南久が原二丁目４番地点の調査 …… 12
第Ⅰ章　調査の概要 …… 12
第１節　調査に至る経緯 …… 12
第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 12
第３節　調査の方法と経過 …… 14
第Ⅱ章　発見された遺構と遺物 …… 16
第１節　横穴墓 …… 16
第２節　横穴墓出土人骨の分析 …… 18
第Ⅲ章　調査のまとめ …… 22

久ヶ原遺跡Ⅵ
１．久が原四丁目 23 番９号地点の調査 …… 30
第Ⅰ章　調査の概要 …… 30
第１節　調査に至る経緯 …… 30
第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 30
第３節　調査の方法と経過 …… 31
第Ⅱ章　発見された遺構と遺物 …… 32
第１節　中世以前の遺構と遺物 …… 34
第２節　中世以降の遺構と遺物 …… 43
第Ⅲ章　調査のまとめ …… 45

報告書抄録 …… 54

挿　図　目　次

南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ
１．南久が原二丁目４番地点の調査
第１図　周辺の遺跡と地形 …… 13
第２図　調査地点位置図 …… 14
第３図　遺構配置図 …… 15
第４図　１号横穴墓実測図 …… 16
第５図　１号横穴墓礫床及び出土人骨実測図 …… 17

久ヶ原遺跡Ⅵ

１．久が原四丁目 23 番９号地点の調査

第１図　周辺の遺跡と地形 …… 31
第２図　調査地点位置図 …… 32
第３図　遺構配置図 …… 33
第４図　１号住居跡　平面図・土層断面図 …… 35
第５図　１号住居跡　出土遺物 …… 35
第６図　２号住居跡　平面図・土層断面図 …… 36
第７図　２号住居跡　出土遺物 …… 37
第８図　３・４・５号住居跡　平面図・土層断面図 …… 38
第９図　６号住居跡　平面図・土層断面図 …… 40
第 10 図　６号住居跡　出土遺物 …… 41
第 11 図　１・２号土坑　平面図・土層断面図 …… 42
第 12 図　１号土坑　出土遺物 …… 42
第 13 図　２号土坑　出土遺物 …… 43
第 14 図　井戸跡　平面図・断面図 …… 44
第 15 図　井戸跡　出土遺物 …… 45

表　目　次

南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ

１．南久が原二丁目４番地点の調査

第１表　１号横穴墓出土人骨　骨計測値 …… 19
第２表　１号横穴墓出土人骨　歯牙観察結果と歯冠計測値 …… 20

久ヶ原遺跡Ⅵ

１．久が原四丁目 23 番９号地点の調査

第１表　１号住居跡　出土遺物観察表 …… 35
第２表　２号住居跡　出土遺物観察表 …… 37
第３表　６号住居跡　出土遺物観察表 …… 41
第４表　１号土坑　出土遺物観察表 …… 43
第５表　２号土坑　出土遺物観察表 …… 43
第６表　井戸跡　出土遺物観察表 …… 45

図　版　目　次

南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ

１．南久が原二丁目４番地点の調査

図版１－１　１号横穴墓　発見時全景　（南西から）…… 24
図版１－２　１号横穴墓　墓室発見時全景　（南西から）…… 24
図版１－３　１号横穴墓　墓室全景　（南西から）…… 24
図版１－４　１号横穴墓　人骨出土状況　（南西から）…… 24
図版１－５　１号横穴墓　出土人骨詳細　（西から）…… 24
図版１－６　１号横穴墓　墓室礫床検出状況　（南西から）…… 24
図版１－７　１号横穴墓　墓室礫床敷設状況　（南西から）…… 24
図版１－８　１号横穴墓　墓室礫床及び羨門閉塞状況　（北から）…… 24
図版２－１　１号横穴墓　墓室奥壁　（南西から）…… 25
図版２－２　１号横穴墓　墓室右側壁①　（南から）…… 25
図版２－３　１号横穴墓　墓室右側壁②　（北東から）…… 25
図版２－４　１号横穴墓　墓室左側壁　（西から）…… 25
図版２－５　１号横穴墓　羨門閉塞状況　（北東から）…… 25
図版２－６　１号横穴墓　墓道セクション　（北西から）…… 25
図版２－７　１号横穴墓　調査風景　（南西から）…… 25
図版３－１　１号横穴墓出土人骨　頭蓋前面観　…… 26
図版３－２　１号横穴墓出土人骨　頭蓋左側面観　…… 26
図版３－３　１号横穴墓出土人骨　頭蓋右側面観　…… 26
図版４－１　１号横穴墓出土人骨　上顎歯…… 27
図版４－２　１号横穴墓出土人骨　左上顎第２大臼歯に認めた齲歯　…… 27
図版４－３　１号横穴墓出土人骨　下顎歯…… 27

久ヶ原遺跡Ⅵ

１．久が原四丁目 23 番９号地点の調査

図版１－１　１号住居跡　検出状況　（東から）…… 48
図版１－２　２・３・５・６号住居跡、井戸跡　検出状況　（南西から）…… 48
図版１－３　２・４・5 号住居跡、井戸跡　検出状況　（北西から）…… 48
図版１－４　調査区　作業風景　（南東から）…… 48
図版１－５　１号住居跡　使用面全景　（東から）…… 48
図版１－６　１号住居跡　東西セクション　（北から）…… 48
図版１－７　１号住居跡　炉　東西セクション　（南東から）…… 48
図版１－８　１号住居跡　甕（第５図－２）出土状況　（北西から）…… 48
図版２－１　２号住居跡　使用面全景　（東から）…… 49
図版２－２　２号住居跡　焼土及び炭化物集中範囲　（南東から）…… 49

図版２－３　２号住居跡　高坏脚部（第７図－８）出土状況　（南東から）…… 49
図版２－４　２号住居跡　掘り方全景　（北東から）…… 49
図版２－５　３号住居跡　使用面全景　（南から）…… 49
図版２－６　４号住居跡　掘り方全景　（東から）…… 49
図版２－７　５号住居跡　使用面全景　（南西から）…… 49
図版２－８　５号住居跡　東西セクション　（南から）…… 49
図版３－１　６号住居跡　使用面全景　（南から）…… 50
図版３－２　６号住居跡　使用面全景　（北西から）…… 50
図版３－３　６号住居跡　炉　全景　（西から）…… 50
図版３－４　６号住居跡　炉　南北セクション　（西から）…… 50
図版３－５　６号住居跡　炉　掘り方　南北セクション　（西から）…… 50
図版３－６　６号住居跡　地床炉　検出状況　（北東から）…… 50
図版３－７　６号住居跡　遺物出土状況　（東から）…… 50
図版３－８　６号住居跡　作業風景　（北東から）…… 50
図版４－１　１号土坑　全景　（東から）…… 51
図版４－２　１号土坑　底部被熱部分　（東から）…… 51
図版４－３　井戸跡　全景　（南から）…… 51
図版４－４　井戸跡　粘土検出状況　（南から）…… 51
図版４－５　井戸跡　粘土検出状況　（西から）…… 51
図版４－６　井戸跡　下部　南北セクション　（東から）…… 51
図版４－７　井戸跡　東壁セクション　（西から）…… 51
図版４－８　井戸跡　北壁セクション　（南から）…… 51
図版５　１号住居跡　出土遺物、２号住居跡　出土遺物 …… 52
図版６　６号住居跡　出土遺物、１号土坑　出土遺物、２号土坑　出土遺物、井戸跡
出土遺物 …… 53

南 久 が 原 二 丁 目 4 番 横 穴 墓 I

1．南久が原二丁目４番地点の調査

1．南久が原二丁目４番地点の調査

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成25年５月17日、南久が原二丁目４番で計画された集合住宅の建設工事現場において、計画建物の基礎部分を掘削するため、外周部にH鋼を打設していたところ、地表面の一部が陥没し、空洞状遺構と内部から人骨が発見されたことが、施工業者より警視庁田園調布警察署へ通報された。警察署は現場検証を実施し、空洞状遺構の形状や人骨の検出状態からみて事件性は低く、文化財の可能性が高いと判断し、大田区立郷土博物館文化財担当（当時）あてに、発見人骨などの取り扱いについて照会された。

担当職員が現地に赴き、上記の特徴に加えて礫床を伴うことから、改めて当該遺構が横穴墓であることを確認した。大田区教育委員会は、当該地がこれまで周知の埋蔵文化財包蔵地として指定されていない土地であり、新発見の遺跡であるため、文化財保護法第96条第１項（遺跡発見に関する届出・停止命令）に基づいて、現状を変更することなく遺跡発見の届出を行うように施工業者を通じて事業者に指示するとともに、東京都教育委員会へ報告した。また、発見された横穴墓について、本格調査を実施する必要がある旨を事業者及び施工業者へ伝えた。

横穴墓は、重機掘削によって墓室の壁面の一部が損壊しており、安全上から現状保存が難しいと判断されたため、記録保存による本発掘調査を実施した。現地調査は、事業者の協力を得て大田区立郷土博物館文化財担当職員が行った。

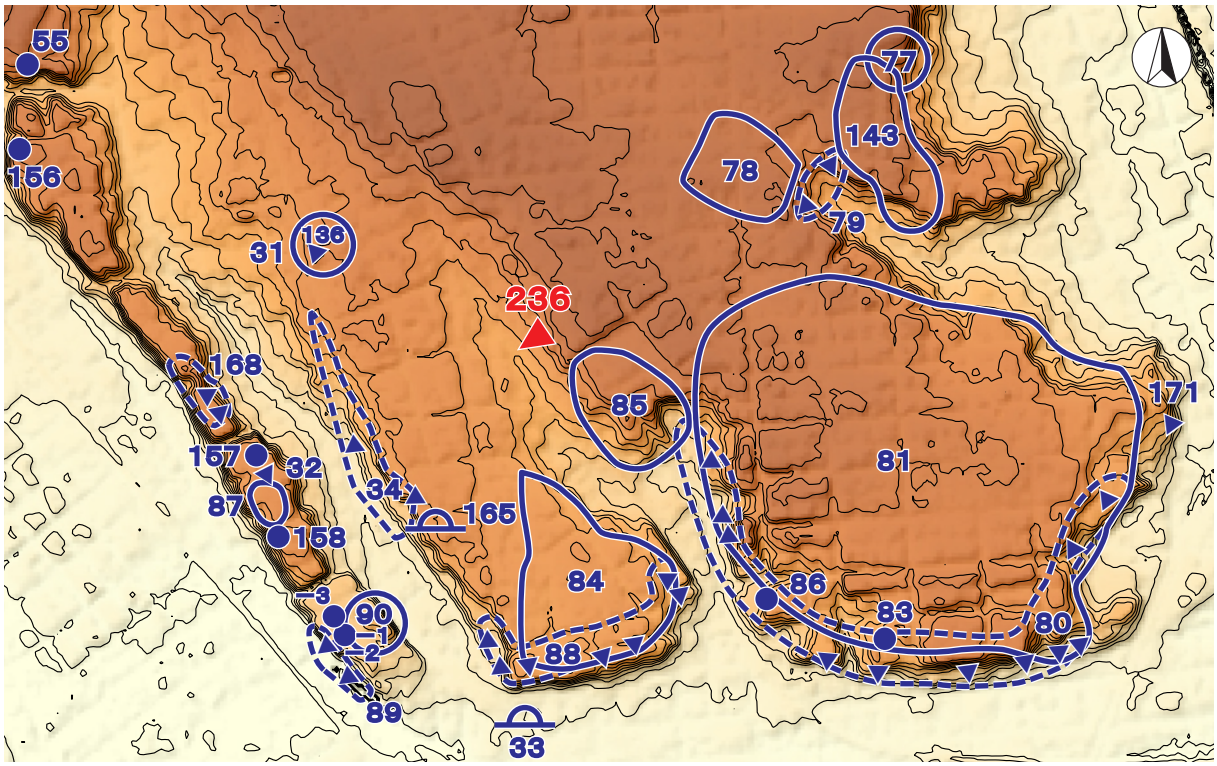
遺跡発見の届出は、５月21日付で事業者から大田区教育委員会あてに提出され、25郷博発第10163号で東京都教育委員会へ進達された。大田区教育委員会は、横穴墓が発見された地点の街区表示をもとに本遺跡を「南久が原二丁目４番横穴墓」（大田区遺跡№.236）と命名し、平成26年４月８日付、26郷博発第10019号で新規登録の遺跡として東京都教育委員会へ申請した。同年４月を以て、本遺跡は東京都遺跡地図に登載された。

第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡は、東京都大田区南久が原二丁目４番に所在し、東急電鉄池上線久が原駅の南東約270ｍ、軌道と併走する大田区道主要第42号線に面している（第２図）。標高は約14ｍである。

武蔵野台地の南東端、多摩川左岸に面したいわゆる「久が原台」には、中小河川などによって開析された谷が複雑に入り組み、西から「鵜の木台地」、「根岸台地」、「久が原台地」に大別される台地が発達しているが、現在の多摩川に接するように、田園調布方面から南東へ延びる狭小な舌状台地とその台地が一端途切れて独立丘を呈する「鵜の木台地」には、旧石器時代から近世に至る光明寺遺跡（大田区遺跡№.90-1）をはじめ、古墳時代後期の荒塚１号墳（大田区遺跡№.90-2）や同２号墳（大田区遺跡№.90-3）、三島塚古墳（大田区遺跡№.158）が所在するほか、鵜の木一丁目横穴墓群（大田区遺跡№.168）、増明院内横穴墓（大田区遺跡№.32）、光明寺横穴墓群（大田区遺跡№.89）といった横穴墓が展開している。

中央の「根岸台地」南部の台地上には、弥生時代後期の集落跡と考えられる嶺遺跡（大田区遺跡№.84）のほか、南縁辺部に根岸横穴墓群（大田区遺跡番号88）、西側斜面部に南久が原二丁目横穴墓群（大田区遺跡№.34）などが所在する。



国土地理院提供の基盤地図情報を用いて QGIS 上で作成

0　S =1/12,000　500m

31. 白山神社横穴墓
32. 増明院内横穴墓
33. 灰塚
34. 南久が原二丁目横穴墓群
55. 西岡 54 号墳
77. 天使幼稚園付近遺跡
78. 久ヶ原貝塚・久ヶ原町 1026 番地貝塚
79. 久が原四丁目横穴墓群
80. 久ヶ原横穴墓群
81. 久ヶ原遺跡
83. スリバチ山古墳
84. 嶺遺跡
85. 千鳥久保貝塚
86. 大塚古墳
87. 増明院裏貝塚
88. 根岸横穴墓群
89. 光明寺横穴墓群
90-1. 光明寺遺跡
90-2. 荒塚 1 号墳
90-3. 荒塚 2 号墳
136. 嶺一丁目遺跡
143. 久原小学校内遺跡
156. 西嶺古墳
157. 鵜の木一丁目 15 番古墳
158. 三島塚古墳
165. 大桜大塚
168. 鵜の木一丁目横穴墓群
171. 久が原四丁目横穴墓群
236. 南久が原二丁目 4 番横穴墓

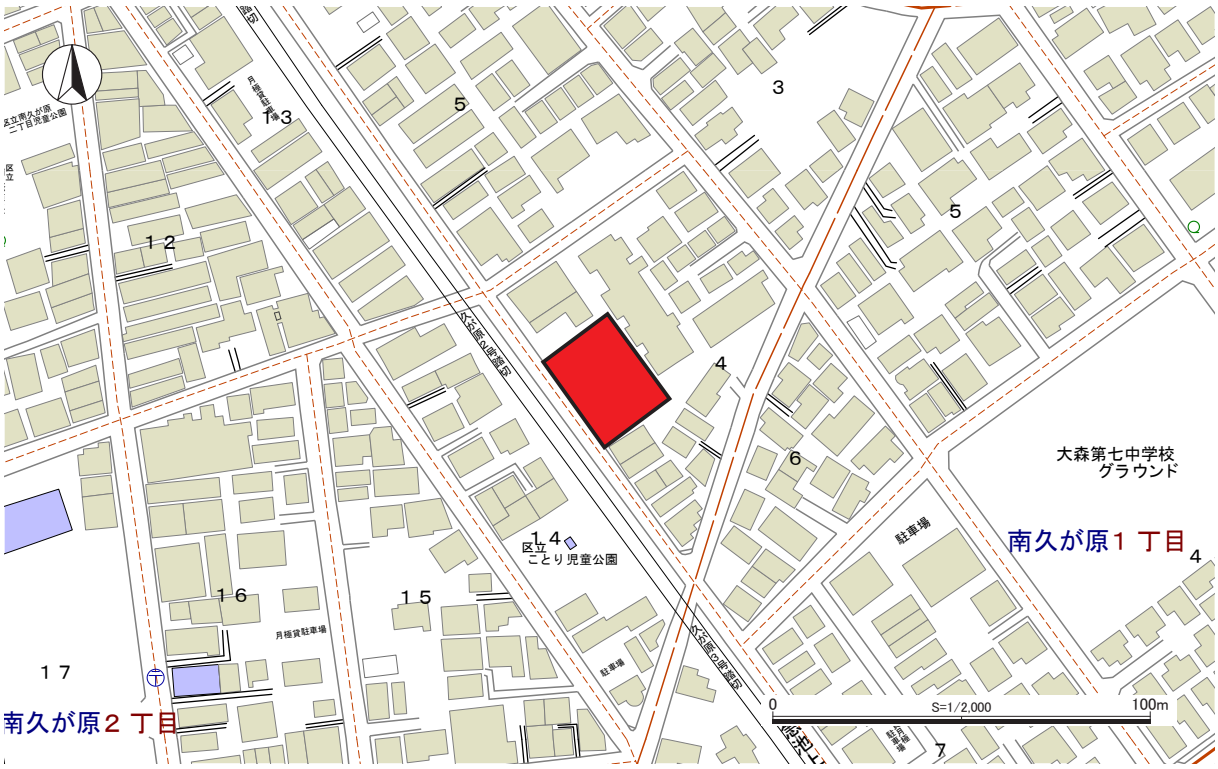
第 1 図　周辺の遺跡と地形

また「久が原台地」南部の平坦かつ広大な台地上には、南関東を代表する弥生時代後期の大集落遺跡であり、「久ヶ原式土器」の標識遺跡として有名な久ヶ原遺跡（大田区遺跡№.81）が所在し、南縁辺部には、久ヶ原横穴墓群（大田区遺跡№.80）などが所在する。

本遺跡は、中央の「根岸台地」と東側の「久が原台地」の間に発達した幅広の谷の東側、南西向きの緩斜面に位置する（第１図）。本遺跡が発見された敷地と池上線の軌道及び区道との比高差はほとんどなく、現状はほぼ平坦であるが、東側の区立大森第七中学校付近から北側の「根岸台地」の縁辺部付近の標高は約 18 ～ 19 m、池上線の西側及び南側付近の標高は約 13 mをはかり、全体的に南西向きの斜面地を形成していることが分かる。

本遺跡の南東部に近在して、「久が原台地」の西側が舌状に張り出す突端には、縄文時代中期から後期の地点貝塚として著名な千鳥久保貝塚（大田区遺跡№.85）が所在する。「久が原台」の台地上には、縄文時代から弥生時代にかけての貝塚や集落が所在するが、横穴墓は、沖積低地との境界付近に面した台地の縁辺に沿って、急峻な崖地に構築されるものが多く、本遺跡のように浅い谷に面した緩斜面の中腹に構築された横穴墓の発見例は少ない。

大田区内の横穴墓については、地域的な分布状況のあり方をもとに、菊池義次氏が 10 群に分類している（菊池 1974）が、本遺跡は、そのうち「久ヶ原・根岸群」（E 群）に含まれるもので、周辺でも複数の横穴墓の発見事例が認められる



第２図　調査地点位置図

ものの（菊池 1974、松崎・深澤ほか 1994）、発見年代が古く詳細な記録も残っていないため、検出地点の特定は難しい。したがって、現在も周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されていない。

本遺跡で検出された横穴墓は、区道の路面下約 1.2 mに墓室床面を有することから、横穴墓の前面に広がる築造当時の旧地表面は、現状よりもかなり低かったことが想定される。大正 11（1922）年に開業した池上電気鉄道（現・東急池上線）の敷設に伴う造成工事の際、盛土によって軌道部分を平坦に均したと考えられ、原地形は大きく改変されているとみられる。そのため、周辺にも多くの横穴墓が同様に埋没しており、今後の開発行為によって新たに発見される可能性は十分に考えられる。

第３節　調査の方法と経過

発掘調査は、事業者と届出などの諸手続きや工事工程との調整を経て、平成 25 年５月 21 日から開始した。横穴墓が検出された位置は、敷地内の南東端の計画建物外であり、外構工事に伴う現地表面下への掘削はほとんど生じなかったため、横穴墓の前面まで調査範囲を広げることができなかった（第３図）。調査面積は墓室を中心とする 3.44 ㎡である。

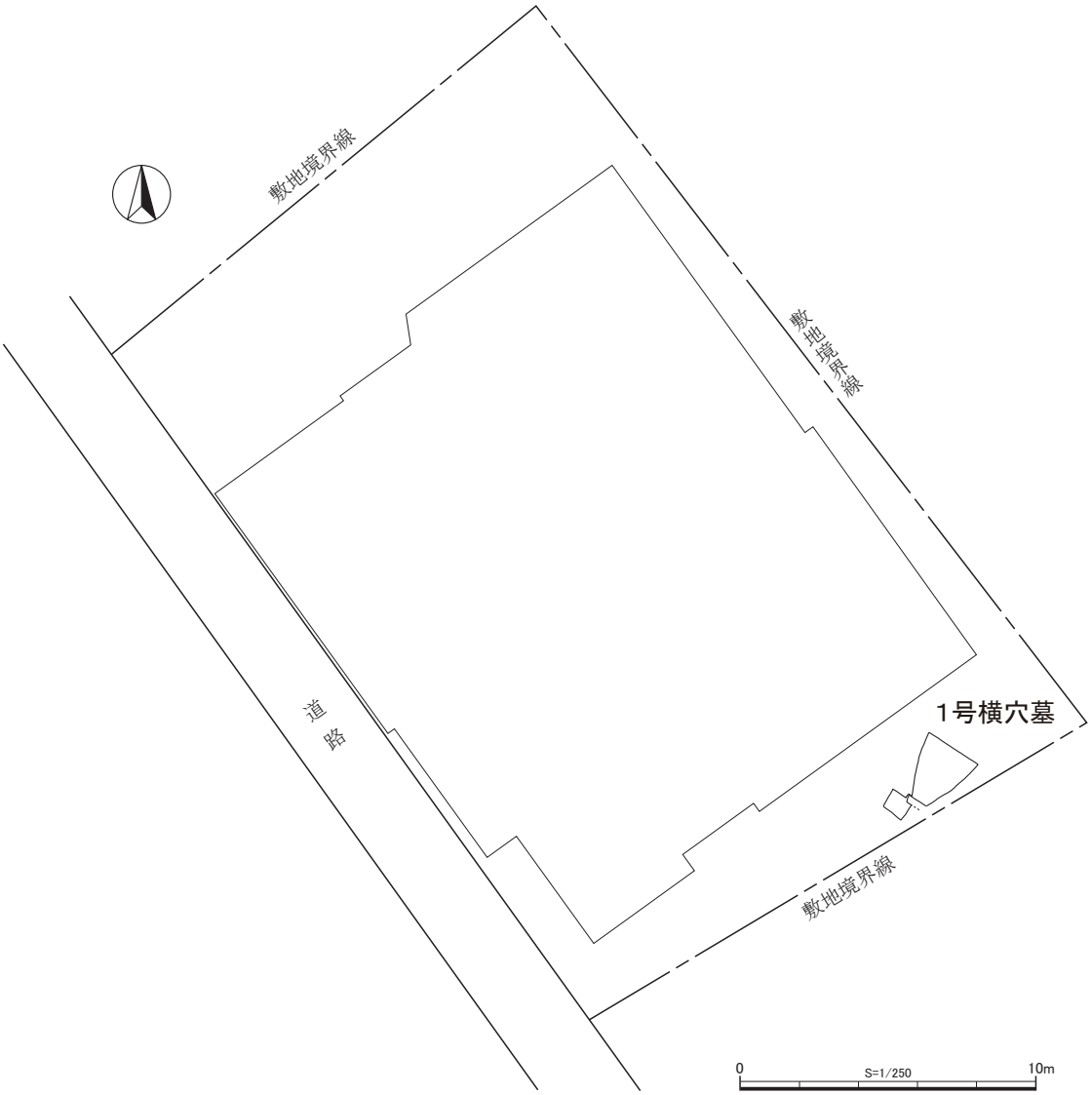
発掘調査及び整理作業は、大田区教育委員会大田図書館文化財担当（当時、大田区立郷土博物館文化財担当）が行った。出土人骨の鑑定は、聖マリアンナ医科大学解剖学教室の長岡朋人准教授・平田和明教授に委託した。人骨及び記録図面と写真などの諸資料は、全て大田区教育委員会大田図書館文化財担当が保管している。

調査経過は以下のとおりである。

平成 25 年５月 21 日　機材搬入。掘削に伴う陥没で墓室内に流入した土砂の除去清掃開始。

5 月 22 日　墓室内清掃及び羨門付近精査。

5 月 23 日　墓室内清掃。



第３図　遺構配置図

5月 24 日　墓室内写真撮影。墓室平面の実測作業開始。

5月 25 日　墓室平面の実測作業。

5月 27 日　人骨取り上げ作業開始。

5月 28 日　人骨取り上げ作業後及び礫取り上げ作業後の墓室内写真撮影。断面図及びセクション図作成。機材撤収。現地調査終了。

なお、補足調査として、平成 29 年１月４日に、現地調査の際に標高の基準点（BM）とした区道マンホールへの水準点移動を実施した。使用した基準点は、大田区街区多角点（３級基準点）の 10C98 である。

第Ⅱ章　発見された遺構と遺物

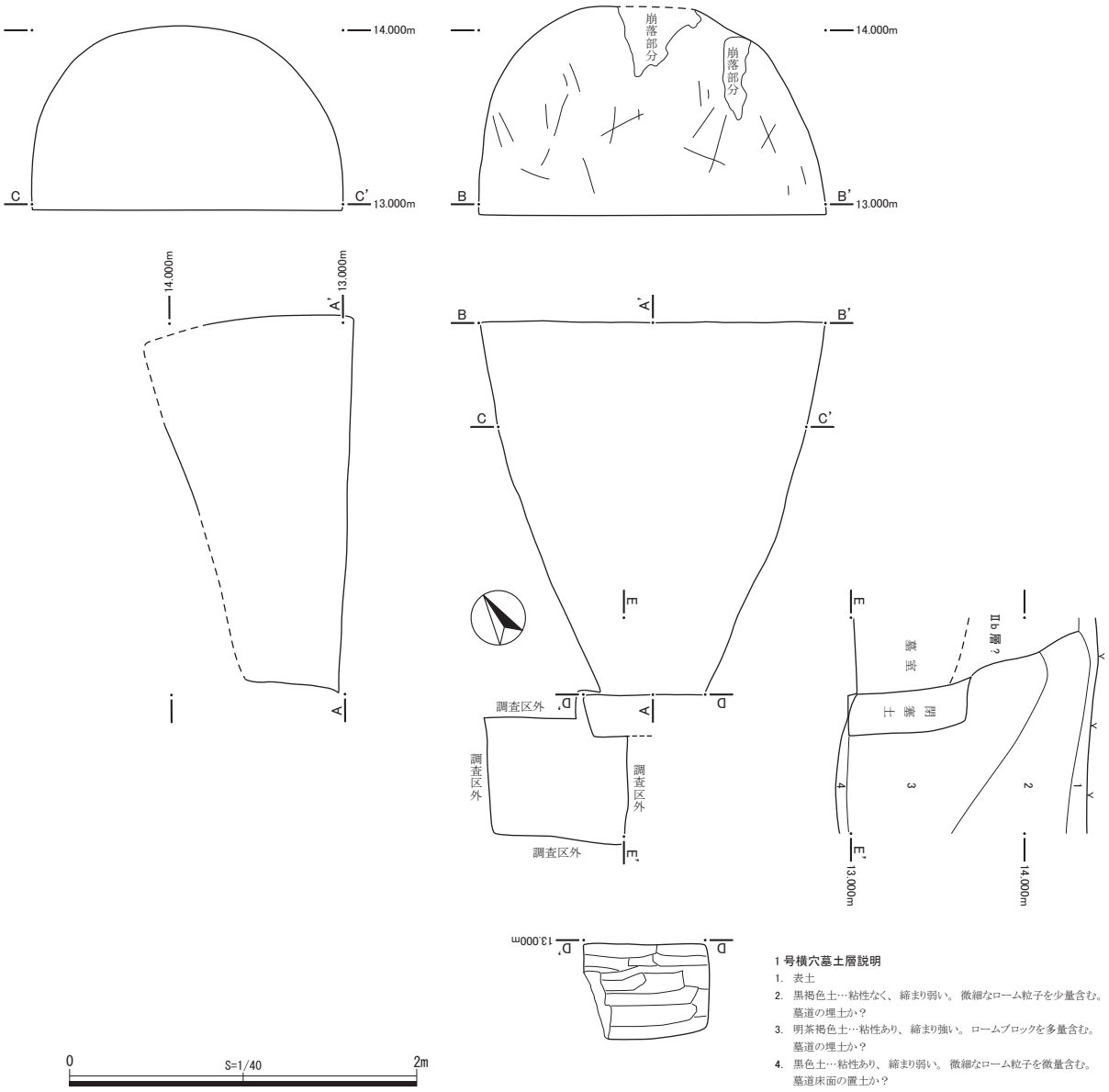
第１節　横穴墓

用語の定義

横穴墓の構造と各部位の名称については、基本的に松崎元樹・深澤靖幸が提示した「横穴墓構造模式図」（松崎・深澤ほか 1994）に従った。しかし、本遺跡で検出された横穴墓は、内部空間については、羨道部と玄室部を明確に区分できないような形態をしているため、本報告書では、墓室と呼称することにする。遺構各部位における左右の呼称は、奥壁から羨門に向かっての左右とする。

１号横穴墓（第４・５図、図版１・２）

発見された遺構は、単室無袖形の横穴墓である。発見時の掘削により、奥壁の壁面の一部が崩落し、天井部に穴が開



第４図　１号横穴墓実測図

いたほか、羨門部に近い右側壁部も掘削によって破壊されていたが、それ以外の遺存状態は比較的良好であった。

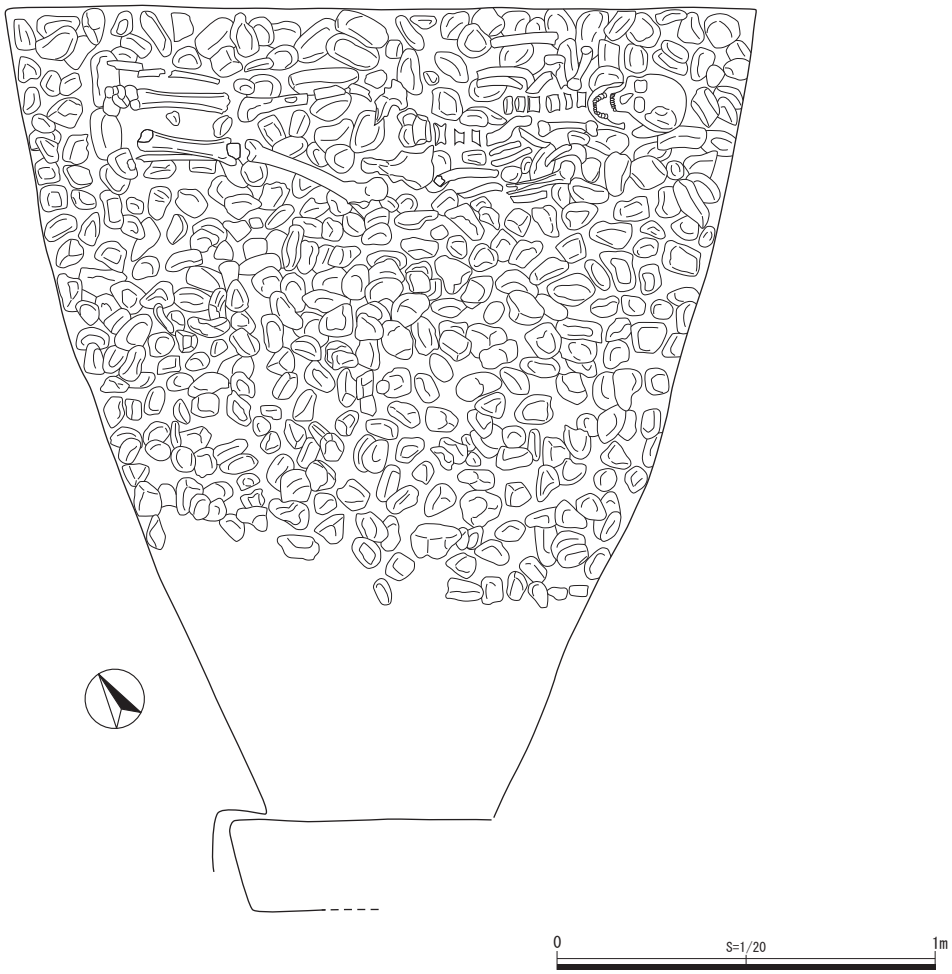
墓室の全長 2.14 m、奥壁幅 2.0 m、奥壁高 1.2 m（復原）、羨門幅 0.60 m、羨門高 0.56 mの規模をはかる小型の横穴墓である。奥壁は直線的で、両側壁がやや丸く膨らむ平面形態をしており、最大幅は奥壁にある。墓室の全長と奥壁幅が近似した計測値を示すことからも分かるとおり、寸胴な平面形態をしている。側壁に明瞭な肩をもたないが、いわゆる「半裁徳利形」の形態を呈する。主軸方位はN－ 33°－Eであり、南南西方向に開口する。天井部はアーチ状である。

羨門と奥壁との比高差は 9.5 ㎝で、奥壁側へわずかに低くなっている。床面に段差は認められず、界石による仕切りもないことから、棺床を明瞭に意識した構造とはなっていない。また、外周をめぐる排水溝も確認できない。

礫床は奥壁から約 1.4 ～ 1.6 mの範囲に敷かれているが、羨門付近には及んでいない。敷設の境界を以て玄室と羨道を区分することも可能であるが、平面及び立面構造の形態から変換点は読み取れない。礫床には、最大でも 10 数㎝程度の小振りな川原石が用いられているが、敷き方もやや疎らで、全体的に粗雑な印象を受ける。

墓室の閉塞にはローム土を切り出した塊を使用しており、閉塞された状態で検出されたが、右側は掘削によって壁面とともに壊されている。閉塞土や墓室壁面には工具による加工痕が明瞭に残存していた。

墓道の構造は、大部分が調査範囲外となる上、今回の工事以前から掘削などの撹乱が及んでいたものと考えられ、不明な点が多いが、主軸上の土層セクションから、閉塞土の設置後、その上部にロームブロックを多量に含んだ明茶褐色土と黒褐色土が厚く堆積し、墓道手前（西側）へ向かって低く傾斜している状況を確認できた。墓室を掘削する際に排出されたローム土を用いて、閉塞土の前面すなわち墓道を閉塞した埋土の可能性が考えられる。



第５図　１号横穴墓礫床及び出土人骨実測図

また、墓道底面には厚さ約6.0㎝の黒色土が水平に堆積していた。この土が、墓道の置土として意図的に敷いたものであるか、或いは墓道構築後の時間経過に伴う腐植土などの自然堆積によるものか、調査範囲が狭いため不明であるが、墓道上部の土層の堆積状況からみて、前者の可能性が高い。こうした状況を勘案すると、本横穴墓は、構築から余り時間を置かずに埋葬が行われ、墓道が埋め立てられたと考えられる。

墓室の奥壁に接するように、人骨１体が主軸と直交し、仰臥伸展の状態で検出された。頭部を左（南東）、爪先を右（北西）へ向けている。重機掘削の際に生じた墓室壁面の崩落土の直撃により、ところどころ欠損していたが、全体的に遺存状態は良好であり、検出状況や残存部位からみて、本横穴墓は単独埋葬であると考えるのが妥当であり、遺体の安置後、追葬や集骨のために人が墓室内部へ侵入した痕跡は認められなかった。ただし、人骨の出土位置は奥壁側へ偏っており、礫床の手前（南西側）に大きなスペースが存在することから、当初から単独埋葬を意識していたと積極的に判断することは難しい。

人骨に伴う副葬品は確認できなかった。また、鉄釘などの出土もなかったことから、埋葬に際して木棺は使用されなかったと考えられる。

第２節　横穴墓出土人骨の分析

本横穴墓から人骨１体が出土した。現地調査において出土状況を記録し取り上げた後、人類学的調査のため、聖マリアンナ医科大学解剖学教室へ搬入し、長岡朋人准教授・平田和明教授による鑑定が行われた。以下にその結果を報告する。

大田区南久が原二丁目４番横穴墓出土古墳時代人骨について

長岡朋人・平田和明（聖マリアンナ医科大学解剖学教室）

１．はじめに

大田区教育委員会によって大田区南久が原二丁目４番横穴墓の発掘が行われ，古墳時代人骨が検出された。以下に人類学的な鑑定結果を報告する。

２．観察方法

性別判定・死亡年齢推定

性別判定はBruzek（2002）とWalker（2008）の方法に従った。寛骨では，耳状面前溝，大坐骨切痕，大坐骨切痕弧，寛骨下端，坐骨恥骨示数の５つの特徴を用いることで高精度の性別判定ができる。また，頭蓋では，項稜，眉上隆起，眼窩上縁，乳様突起，オトガイ隆起の発達程度により性別判定が可能である。

人骨の死亡年齢の推定は，腸骨耳状面（Lovejoy et al., 1985; Buckberry and Chamberlain, 2002）と第一肋骨（Kunos et al., 1999）の観察に基づく。

頭蓋・四肢骨計測

頭蓋・四肢骨の計測は，Martin and Knussmann（1988）に，歯の計測は藤田（1949）従った。計測値は第１・２表に載せた。

第１表　１号横穴墓出土人骨　骨計測値

Martin No.	計測項目	計測値 [1]	Martin No.	計測項目	計測値 [1]	
頭蓋			頭蓋			
1	脳頭蓋最大長	178	61	上顎歯槽突起幅	60.1	
5	頭蓋底長	100	65	下顎関節突起幅	131.4	
8	脳頭蓋最大幅	140	69	オトガイ高	32.8	
8/1	頭蓋長幅示数	78.7	71	下顎枝幅（右）	36.8	
9	最小前頭幅	90.2	71	下顎枝幅（左）	39.8	
9/8	横前頭頭頂示数	64.4	72	前側面角	89.5	
10	最大前頭幅	114.0	73	鼻側面角	93.7	
11	両耳幅	127.9	74	歯槽側面角	71.5	
11b	ラディクラーレ幅	127.0	顔面平坦度			
12	最大後頭幅	111.2		前頭骨弦長	96.0	
16	大後頭孔幅	29.5		前頭骨垂線長	15.5	
17	バジオン・ブレグマ高	133		前頭骨平坦示数	16.1	
17/1	頭蓋長高示数	74.7		鼻骨弦長	9.9	
17/8	頭蓋幅高示数	53.4		鼻骨垂線長	2.9	
(1+8+17)/3	頭蓋モズルス	150.3		鼻骨平坦示数	29.4	
23	脳頭蓋水平周	515		頬上顎部弦長	98.6	
24	横弧長	316		頬上顎部垂線長	15.7	
25	正中矢状弧長	376		頬上顎部平坦示数	15.9	
26	正中前頭弧長	122	上腕骨		右	左
27	正中頭頂弧長	132	7	最小周	58	
28	正中後頭弧長	122	橈骨		右	左
29	正中前頭弦長	112.0	4	骨体横径		15.9
30	正中頭頂弦長	117.5	5	骨体矢状径		9.8
31	正中後頭弧長	99.0	5/4	骨体断面示数		61.7
40	顔長	93.0	大腿骨		右	左
40/5	顎示数	93.0	6	骨体中央矢状径	25.6	25.6
43	上顔幅	103.2	7	骨体中央横径	26.0	27.8
45	頬骨弓幅	133.2	6/7	体中央断面示数	98.3	92.3
46	中顔幅	99.6	8	骨体中央周	81	87
47	顔高	111.9	9	骨体上横径		31.7
48	上顔高	63.3	10	骨体上矢状径		24.1
48/45	コルマン上顔示数	47.5	15	頚垂直径		34.5
48/46	ウイルヒョウ上顔示数	63.5	16	頚矢状径		30.4
49a	眼窩間幅	23.3	16/15	頚断面示数		88.1
50	前眼窩間幅	18.5	17	頚周		95
51	眼窩幅（右）	41.3	18	頭垂直径		43.3
51	眼窩幅（左）	40.6	19	頭横径		42.9
52	眼窩高（右）	32.4	20	頭周		138
52	眼窩高（左）	32.5	脛骨		右	左
52/51	眼窩示数（右）	78.6	8a	栄養孔位最大径	31.1	30.6
52/51	眼窩示数（左）	80.0	9a	栄養孔位横径	20.8	23.1
54	鼻幅	26.4	9a/8a	栄養孔位断面示数	67.0	75.4
55	鼻高	48.4	10a	栄養孔周	82	84
54/55	鼻示数	54.4	10b	最小周	71	71
60	上顎歯槽突起長	52.6				

[1] 単位はｍｍであるが角度計測の単位は°である。

３．個体数・出土部位

人骨出土部位

全身の骨が残り，保存状態は良好である。頭蓋，下顎骨，左右鎖骨，左右肩甲骨，左右上腕骨，左橈骨，左尺骨，肋骨，頚椎，胸椎，腰椎，仙骨，左右寛骨，左右大腿骨，左右脛骨，左右腓骨，足根骨が残る。頭蓋は脳頭蓋と顔面頭蓋がほ

第２表　１号横穴墓出土人骨　歯牙観察結果と歯冠計測値

上下	側	歯種	近遠心径（mm）	頬舌径（mm）	所見
上顎	右	1	7.6	7.0	
上顎	右	2	6.7	5.5	
上顎	右	3	7.4	7.9	
上顎	右	4	6.9	9.0	
上顎	右	5			歯槽閉鎖
上顎	右	6			歯槽閉鎖
上顎	右	7			歯槽開放
上顎	右	8			歯槽開放
上顎	左	1	7.7	6.9	
上顎	左	2	6.6	6.1	
上顎	左	3	7.0	7.9	
上顎	左	4	7.1	9.1	
上顎	左	5	7.3	9.0	
上顎	左	6			歯槽閉鎖
上顎	左	7	10.1	10.7	遠心歯頚部の齲蝕
上顎	左	8			歯槽閉鎖
下顎	右	1	4.7	5.4	舌側面の歯石沈着
下顎	右	2	5.7	6.2	舌側面の歯石沈着
下顎	右	3	6.8	7.4	
下顎	右	4	6.6	7.4	
下顎	右	5	6.9	8.4	
下顎	右	6	10.9	11.1	
下顎	右	7	11.0	10.7	
下顎	左	1	5.4	5.7	舌側面の歯石沈着
下顎	左	2	5.8	6.3	舌側面の歯石沈着
下顎	左	3	6.6	7.4	
下顎	左	4	7.2	7.9	
下顎	左	5	6.8	8.6	
下顎	左	6	11.2	10.8	
下顎	左	7	10.8	10.6	

ぼ完全な状態で出土していた。

歯は左上顎第二小臼歯１本，左上顎第二大臼歯１本が残る。左上顎第二小臼歯はエナメル質のみの咬耗であり，左上顎第二大臼歯は象牙質が点状に露出する。歯は上下顎骨に植立しておらず，以下の歯式の通りである。

○○●●４３２１	１２３４５●７●
７６５４３２１	１２３４５６７

ただし，アラビア数字は残存永久歯を示す。○は歯槽開放を，●は歯槽閉鎖をそれぞれ示す。

個体数

重複する出土部位はない。最小個体数は１個体である。

４．性別・死亡年齢

性別

寛骨では，前耳状溝が深く，大坐骨切痕が広いため，女性と判定できた。頭蓋では，眉上隆起，乳様突起が未発達，眼窩上縁が鋭利であったため，女性である判定に矛盾はなかった。

死亡年齢

腸骨耳状面は，Lovejoy et al. のステージ４，Buckberry and Chamberlain のステージ４であった。また，第１肋骨の胸骨端には骨増殖による窪みを認めた。腸骨耳状面では 30 ～ 60 歳程度，第一肋骨では 40 歳前後であると推定できた。死亡年齢はおよそ 30 ～ 60 歳と推定できた。

５．所見

頭蓋

乳様突起，ブレグマ，項稜は未発達であり，前頭結節は発達していた（図版３－１～３）。側頭線は不明瞭で，頬骨弓は広く，頭蓋上面から見ても頬骨の張り出しを認めた。脳頭蓋最大長は 178 ㎜，脳頭蓋最大幅は 140 ㎜，脳頭蓋長幅示数は 78.7 であり，中頭に分類された。下顎枝は幅が広く，下顎骨は頑丈であり，オトガイ孔は左右とも第二小臼歯の位置にあった。

歯

歯は，右上顎第２大臼歯と第１大臼歯，左上顎第１大臼歯と第３大臼歯が生前喪失していた（図版４－１）。左上顎第２大臼歯に，遠心歯頚部に象牙質に達する齲蝕を認めた（図版４－２）。また，左右の下顎切歯の舌側面には歯石の沈着を認めた（図版４－３）。

四肢骨

上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の殿筋粗面，粗線は未発達であり，四肢長骨は華奢で細かった。四肢長骨の骨端が破損していたため身長の推定はできなかった。

６．まとめ

出土人骨は保存状態が良好であり，個体数は１個体であった。30 ～ 60 歳の女性で，24 点中１点の歯に齲歯を認めた。

＜参考文献＞

Bruzek J. (2002) A method for visual determination of sex using the human hip bone. American Journal of Physical Anthropology, 117: 157-168.

Buckberry J.L. and Chamberlain A.T. (2002) Age estimation from the auricular surface of the ilium: A revised method. American Journal of Physical Anthropology, 119: 231-239.

藤田恒太郎（1949）歯の計測規準について．人類学雑誌、61：27-32.

Kunos C.A., Simpson S.W., Russell K.F., and Hershkovitz I. (1999) First rib metamorphosis: Its possible utility for human age-at-death estimation. American Journal of Physical Anthropology, 110: 302-323.

Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., and Mensforth R.P. (1985) Chronological metamorphosis of the auricular surface of the illium: A new method of determining adult age at death. American Journal of Physical Anthropology, 68: 15-28.

Martin R. and Knussmann R. (1988) Anthropologie. Band Ⅰ. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.

Walker P.L. (2008) Sexing Skulls Using Discriminant Function Analysis of Visually Assessed Traits.

American Journal of Physical Anthropology, 136: 39-50.

第Ⅲ章　調査のまとめ

今回の調査において、本遺跡から単室無袖形の横穴墓１基（以下、本横穴墓）が発見された。その平面形態は、松崎元樹氏が「Ｂ１類（撥形）」もしくは「Ｂ２類（胴張り形）との中間形態」としたもの（松崎 1994）、また、本遺跡と谷を挟んで指呼の距離にある「根岸横穴墓群」を含む無袖形の横穴墓について、詳細に検討・細分した青木敬氏の分類案（青木 2003）に従えば、Ｂ６－２類もしくはＢ７類に近似すると考えられる。

埋葬人骨に伴う副葬品や構築年代の手がかりとなる遺物が全く出土しなかったため、詳細に年代を特定することは難しいが、墓室の小型化、墓室内の段差（棺床）や界石の消失、小さめの川原石が疎らに敷かれた礫床やローム土を用いた閉塞状況など、遺構の状況は簡略化が進んだ段階の築造であることを示しており、時期的には松崎・青木両氏の編年案におけるⅢ期に位置付けられ、７世紀後半以降に比定して大過ないものと考えられる。

本横穴墓から出土した人骨は、人類学的な鑑定により壮年の女性と判定された。本文中でも述べたとおり、本横穴墓が当初から単独埋葬を意識して築造されたと積極的に考えることは難しいが、終末段階において、結果的に女性が単独で埋葬された小型の横穴墓の存在は、埋葬形態における一類型として貴重なものである。複数埋葬の横穴墓が数多く見られる大田区内において、こうした単独埋葬が、被葬者の家族構成や所属する地域社会のどのような関係性の中で行われた結果であるのか、今後検討されるべき課題である。

また、本横穴墓では、墓道の構造がほとんど分からなかったものの、自然堆積ではなく、埋葬後に意図的に墓道を埋めた可能性を指摘した。大田区内において、墓道の遺存状態が良好に検出された事例としては、鵜の木一丁目横穴墓群（大田区遺跡№.168）が挙げられるが、本横穴墓と同様、閉塞石（土）のみでなく、土砂による閉塞を伴っていた可能性が指摘されている（岡田 2007）。前述した女性の単独埋葬など、埋葬形態のあり方や墓前祭祀との有機的関連性を視野に入れた検討が必要である。

今回の掘削工事において、敷地内では斜面に平行して掘削工事が行われ、複数基の横穴墓が検出される懸念もあったが、結果的に発見された横穴墓は１基のみであった。しかし、発掘調査期間中、地元住民から、本遺跡の北東側敷地で 50 年以上前に横穴墓が発見されたとの伝聞情報を得ており、第Ⅰ章第２節で述べた横穴墓がこれに該当すると思われる。本調査地の敷地内においても、本横穴墓発見以前から散布していたとみられる川原石数点を確認しており、周辺にも数基、開発等で湮滅した横穴墓の存在が推定され、一定のまとまりを持った横穴墓群が展開していたと考えられる。

本横穴墓は、広義には「久ヶ原・根岸横穴墓群」に含まれ、周辺には「鵜の木・光明寺横穴墓群」など、数多くの横穴墓群が展開している。今後、調査事例の増加を待たなければならない側面もあるが、本横穴墓も、それらの横穴墓群との比較の中で、その年代的な位置付けや性格を考えていく必要があろう。

＜参考文献＞

青木　敬 2003「第４章　根岸横穴墓群の検討－墓室の構造を中心にして－」『根岸横穴墓群発掘調査報告書－大田区千鳥三丁目 43 番地区住宅開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』、関東菱重興産株式会社・興亜開発株式会社・株式会社四門

岡田大輔 2007『大田区鵜の木一丁目横穴墓群５号墓・６号墓発掘調査報告書－大田区鵜の木一丁目６番所在鵜の木一丁目緑地（仮称）公園造成に伴う発掘調査－』、大田区・株式会社武蔵文化財研究所

菊池義次 1974「第Ⅳ編　古墳時代文化」『大田区史（資料編）考古』Ⅰ、大田区

松崎元樹 1994「Ⅲ．多摩川下流域左岸における横穴墓の検討」『考古学からみた大田区－横穴墓・古代・中世　資料編－』（『大田区の文化財』第 30 集）、大田区教育委員会

松崎元樹・深澤靖幸ほか 1994『考古学からみた大田区－横穴墓・古代・中世　資料編－』（『大田区の文化財』第 30 集）、大田区教育委員会

図 版 1

1.1号横穴墓 発見時全景 （南西から）

2.1号横穴墓 墓室発見時全景 （南西から）

3.1号横穴墓 墓室全景 （南西から）

4．1号横穴墓 人骨出土状況 （南西から）

5.1号横穴墓 出土人骨詳細 （西から）

6.1号横穴墓 墓室礫床検出状況 （南西から）

7.1号横穴墓 墓室礫床敷設状況 （南西から）

8.1号横穴墓 墓室礫床及び羨門閉塞状況 （北から）

図 版 2

1.1号横穴墓 墓室奥壁（南西から）

2.1号横穴墓 墓室右側壁①（南から）

3.1号横穴墓 墓室右側壁②（北東から）

4.1号横穴墓 墓室左側壁（西から）

5.1号横穴墓 羨門閉塞状況（北東から）

6.1号横穴墓 墓道セクション（北西から）

7.1号横穴墓 調査風景（南西から）

図 版 3

1.1号横穴墓出土人骨 頭蓋前面観

2.1号横穴墓出土人骨 頭蓋左側面観

3.1号横穴墓出土人骨 頭蓋右側面観

図 版 4

1.1号横穴墓出土人骨　上顎歯

2.1号横穴墓出土人骨　左上顎第2大臼歯に認めた齲歯

3.1号横穴墓出土人骨　下顎歯

久　ヶ　原　遺　跡　Ⅵ

１．久が原四丁目 23 番９号地点の調査

1．久が原四丁目 23 番 9 号地点の調査

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成 26 年 8 月 29 日、個人の建築主から大田区久が原四丁目 23 番 9 号（住居表示）の土地が久ヶ原遺跡（大田区遺跡 No.81）に該当しているため、大田区教育委員会へ個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出があった。大田区教育委員会は、この届出書を東京都教育委員会へ進達し、東京都教育委員会は遺跡の遺存状態・内容等を把握するための「試掘調査」を行なう必要がある旨を届出者に通知した。

これを受けて大田区教育委員会は、住宅建設に伴う埋蔵文化財の試掘調査を平成 26 年 10 月 28・29 日に実施した。

調査の結果、建設予定地に設置した３箇所の試掘トレンチ（１～３区）の内、１・３区から弥生時代後期後半から古墳時代前期とみられる遺構と土器片等の遺物が発見された（第３図）。

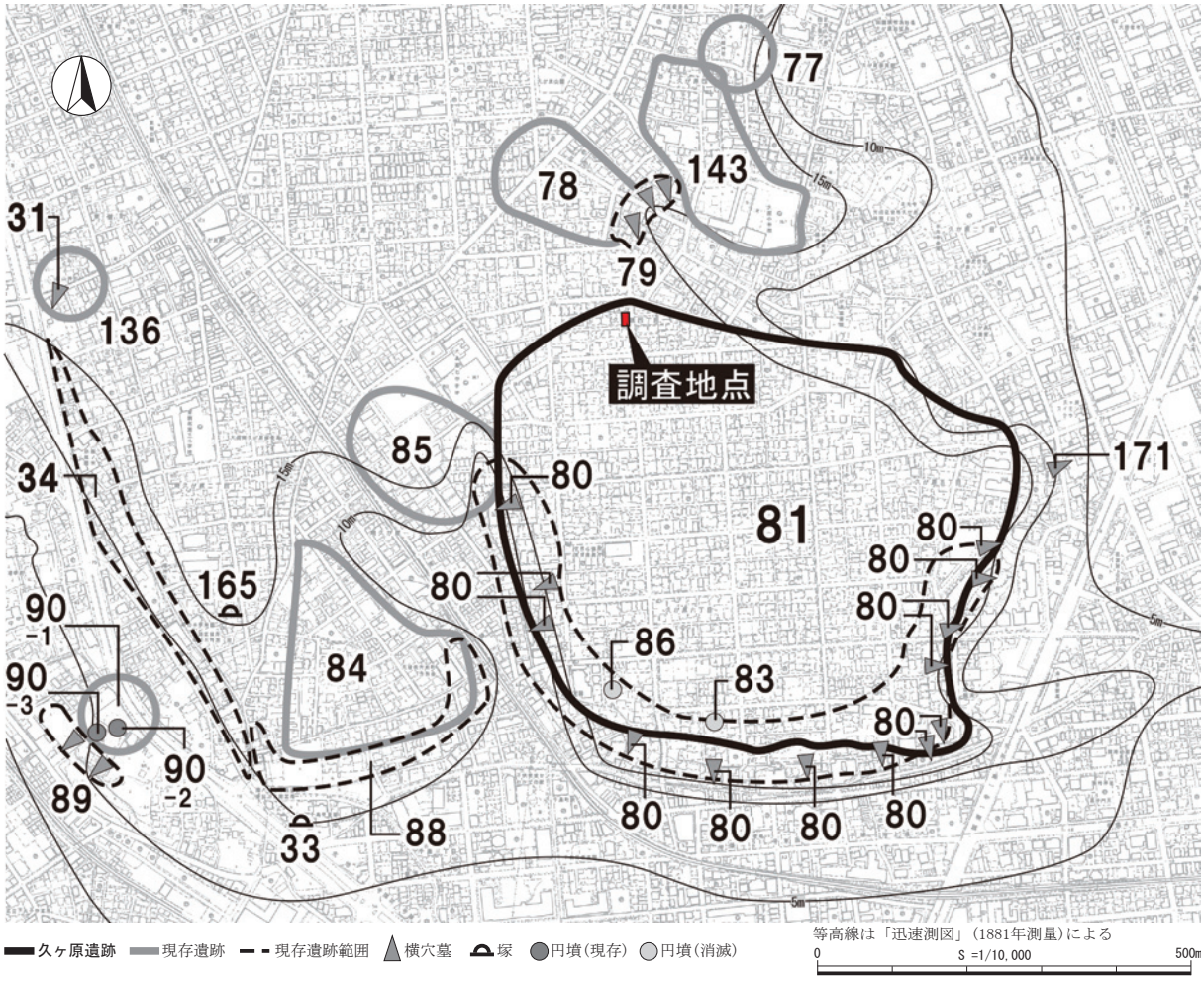
そこで、大田区教育委員会は試掘調査の結果に基づき、埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について建築主の協力を得て本発掘調査を実施することとした。

第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡

本調査地点である大田区久が原四丁目 23 番 9 号は、東急池上線久が原駅の東方向及び東急池上線千鳥町駅の北東方向から約 600 ｍの距離に位置する。標高は約 18 ｍである。本調査地点の西側約 1.6km には多摩川、東側約 1.1km には呑川がそれぞれ北西から南東方向に流れている。

本調査地点は、弥生時代後期の南関東を代表する集落跡として周知され、「久ヶ原式土器」の標識遺跡となる、久ヶ原遺跡（大田区遺跡№.81）の北限に該当する。久ヶ原遺跡は、武蔵野台地南東端、呑川中流域右岸の久が原台と呼ばれる平坦な台地上に位置する。現在の久が原四～六丁目・千鳥一丁目にかけて広がり、総面積は 27 万㎡におよぶ（第１図）。

久ヶ原遺跡をはじめ、その周辺に位置する嶺遺跡（大田区遺跡№.84）や久原小学校内遺跡（大田区遺跡№.143）では、これまでに弥生時代後期の竪穴住居跡が多く発見、調査されており、弥生時代後期の大規模集落の様相が明らかとなりつつある。特に久ヶ原遺跡は、集落の規模から、周辺域の拠点集落であったと考えられている。また、久ヶ原遺跡の北部域からは、古墳時代前期の住居跡群も発見されていることから、久が原台における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の継続性が窺える。



31. 白山神社横穴墓
33. 灰塚
34. 南久が原二丁目横穴墓群
77. 天使幼稚園付近遺跡
78 久ヶ原貝塚・久ヶ原町 1026 番地貝塚
79. 久が原四丁目横穴墓群
80. 久ヶ原横穴墓群
81. 久ヶ原遺跡
83. スリバチ山古墳
84. 嶺遺跡
85. 千鳥久保貝塚
86. 大塚古墳
88. 根岸横穴墓群
89. 光明寺横穴墓群
90-1. 光明寺遺跡
90-2. 荒塚1号墳
90-3. 荒塚2号墳
143. 久原小学校内遺跡
165. 大桜大塚
171. 久が原五丁目17番横穴墓

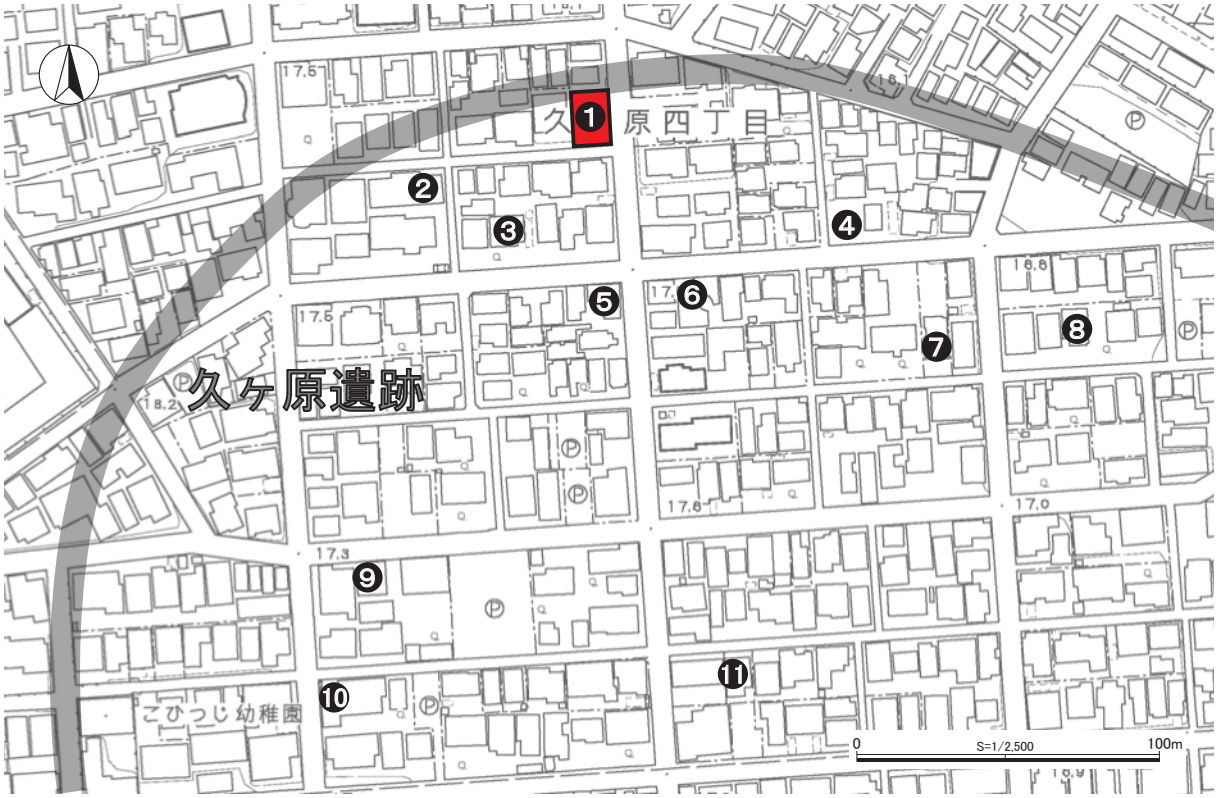
第１図　周辺の遺跡と地形

第３節　調査の方法と経過

発掘調査は、大田区教育委員会指導のもと、平成 26 年 11 月 10 日から 12 月 5 日まで実施した。調査範囲は試掘調査で遺構が検出され、建設工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶ、試掘１区の大半及び試掘３区を含む 58.36 ㎡となった（第３図）。

試掘調査終了時に、本発掘調査への移行が想定され、前述の試掘調査区を埋め戻さずブルーシートによって遺跡を保護していたことから、新たに調査対象となる範囲について、盛土・耕作土の除去を重機によって行なった。遺構検出及び遺構覆土の掘削、図化等の記録作業は人力にて行なった。

遺構の検出面は、試掘調査時に検出されている遺構が弥生時代のものであることから、主に縄文時代遺物包含層とした。また、試掘調査の結果から複数の遺構の重複が見込まれていたため、綿密な検出作業を行ない、重複関係の把握に努めた。遺構検出結果を踏まえ、重複順序の新しい遺構から順次調査を行なった。



❶ **久が原四丁目 23 番 9 号地点（本調査地点）**
❷ 久が原四丁目 22 番 4 号地点
❸ 久が原四丁目 22 番 12 号地点
❹ 久が原四丁目 24 番 14 号地点
❺ 久が原四丁目 31 番 8 号地点
❻ 久が原四丁目 30 番 3 号地点
❼ 久が原四丁目 30 番 12 号地点
❽ 久が原四丁目 27 番 4 号地点
❾ 久が原四丁目 39 番 2 号地点
❿ 久が原四丁目 40 番 19 号地点
⓫ 久が原四丁目 41 番 3 号地点

第２図　調査地点位置図

遺構等の測量は、大田区都市基盤整備部都市基盤管理課より使用許可を受けた、街区多角点（点名：1A469・10C91 等）を基とした基準点及び水準点を対象地内に設け、トータルステーションと手実測を併用して行なった。遺構等の記録写真は、デジタル一眼レフカメラによって撮影した。

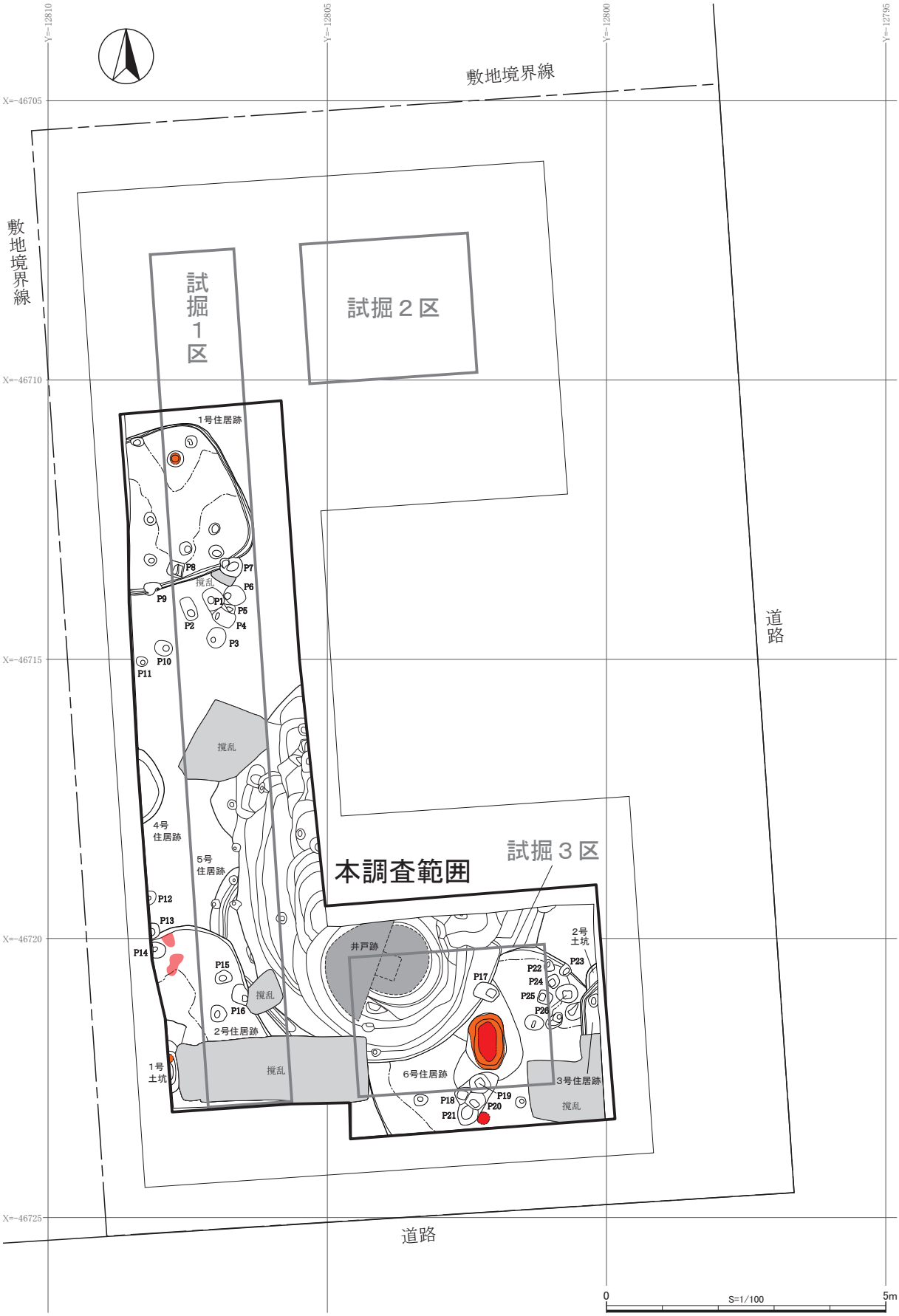
第Ⅱ章　発見された遺構と遺物

今回の調査において発見された遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期の竪穴住居跡６軒（１～６号住居跡）、土坑２基（１・２号土坑）の他、井戸跡１基、ピット 26 基（Ｐ１～26）である（第３図）。ピットを除く遺構はいずれも調査範囲外に及んでおり、全容を把握できたものはない。

竪穴住居跡は、井戸跡及び現代の造成によって撹乱されているものもあり（２・３・５号）、必ずしも良好な遺存状態とは言えない。

土坑は、１号が２号住居跡を、２号が３号住居跡をそれぞれ切っている。出土遺物や覆土の様相から、弥生時代から古代のものと考えられる。

井戸跡は、覆土の様相等から弥生時代の竪穴住居跡と考えていたが、調査を進めるにあたって有段の昇降


Y=−12810
Y=−12805
Y=−12800
Y=−12795
X=−46705
X=−46710
X=−46715
X=−46720
X=−46725
敷地境界線
敷地境界線
試掘1区
試掘２区
試掘３区
本調査範囲
1号住居跡
2号住居跡
3号住居跡
4号住居跡
5号住居跡
6号住居跡
1号土坑
2号土坑
井戸跡
撹乱
道路
道路
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
0
S=1/100
5m

第３図　遺構配置図

施設を伴う井戸跡であることが判明した。覆土下部において出土した遺物から、中世に属するとみられる。

ピットは１・２・６号住居跡付近にそれぞれ集中し、これらの遺構を切っている。覆土は今回確認した耕作土と類似することから、近代以降のものと考えられる。１・６号住居跡付近では、北東・南西方向に並ぶような配置状況だが、用途については不明である。

今回の調査で出土した遺物は､弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器 122 点（6,169 ｇ）･敲石１点（775 ｇ）、中世の陶器５点（164 ｇ）・炻器５点（395 ｇ）、時期不明土器５点（39 ｇ）・砥石１点（38 ｇ）縄文土器４点（58 ｇ）、須恵器１点（50 ｇ）、礫 51 点（11,650 ｇ）が出土した。

遺物は竪穴住居跡から出土した弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器片が主体であり、この内２号住居跡出土の遺物が大半を占める。１・２・６号住居跡からは、床面直上に高坏形土器や甕形土器、敲石等がみられた。また、中世の陶器類は井戸跡とその周辺から出土している。

第１節　中世以前の遺構と遺物

竪穴住居跡

１号住居跡（第４・５図、第１表、図版１・５）

調査区の北側において検出された。Ｐ７～９及び撹乱に切られる。西側は調査範囲外となるが、平面形は隅丸方形を呈するとみられる。規模は東西 2.5 ｍ以上、南北 2.8 ｍ、遺構検出面から床面までの深さは 15㎝を測る。

壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は素掘りの箇所も認められるが、ほぼ平坦に貼床が施される。隅部周辺を除き硬化する。また、住居跡の南北中央付近以南では、貼床が２面確認された。周溝は検出された範囲において、幅４～ 11㎝、床面からの深さが 10㎝の規模で全周する。

北東部に径約 30㎝、床面からの深さが 6㎝を測り、底面が被熱した浅い掘り込みが検出された。地床炉と考えられるが、被熱の状態は顕著ではない。ピットは８基検出された（Ｐ１～８）。円形または楕円形の平面形をもち､径約 20㎝､床面からの深さが８～ 15㎝を測る。Ｐ７は２面目の床面において検出されている。

覆土は黄色スコリアを含み、粒子が粗い黒色及び黒褐色土が主体である。

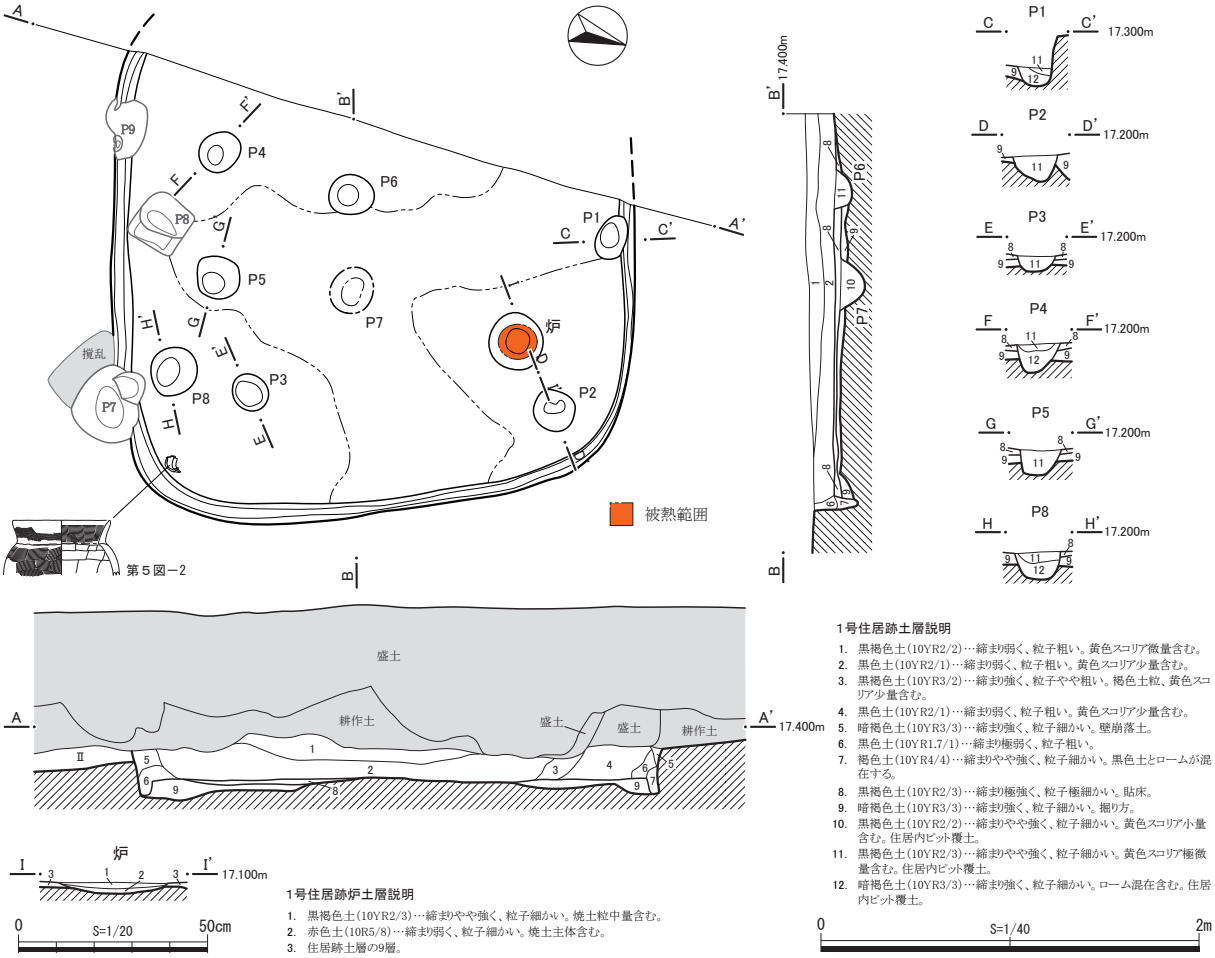
遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期の壺３点（30 ｇ）・台付甕４点（795 ｇ）、礫４点（150 ｇ）が出土した。これらは覆土の中層から下層を中心に破損した状態で出土しており、この内２点を図示した。

１の単口縁ハケ調整の台付甕は竪穴床面南東側直上から潰れた状態で出土した。器面は被熱を受け剥離しており、脚部は出土していない。胴部中央には焼成後に外側より加えられた穿孔痕がある。２は焼成が良好な小型の甕片であり、胴部下半と脚部片は出土していない。これらの図示した遺物は古墳時代前期初頭の特徴を示している。

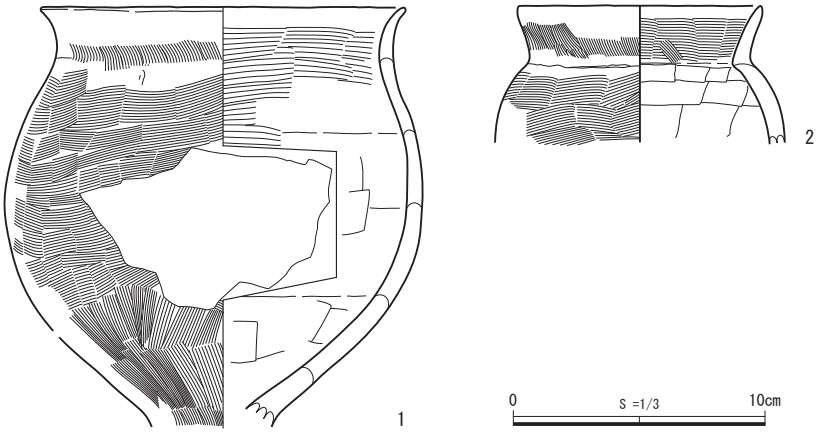
２号住居跡（第６・７図、第２表、図版１・２・５）

調査区の南西部分において検出された。１号土坑、Ｐ 13 ～ 16、撹乱に切られ、５号住居跡を切る。西側及び南側は調査範囲外となる。

平面形は隅丸方形を呈するとみられる。規模は東西 2.1 ｍ以上、南北 3.7 ｍ以上、遺構検出面から床面までの深さは 17㎝を測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面は中央部分が硬化する。掘り方は壁際を掘り込み、



第４図　１号住居跡　平面図・土層断面図



第５図　１号住居跡　出土遺物

第１表　１号住居跡　出土遺物観察表

掲載No.	出土地点	器種	部位	計測値(cm) 口径	器高	底径	重量(g)	成形・調整等	胎土・焼成・色調	備考
1	1号住居跡南東部床直	台付甕	口縁部～胴部下半	16.2	〈14.5〉	―	690	内外面ヨコナデ後、外面ハケ、内面口縁部～胴部上半部粗いハケ、下半部粗いヘラナデ。	胎土:砂粒少量。やや密 焼成:良好 色調:黒褐色	胴部中央に穿孔。 被熱のため外部剥離著しい。
2	1号住居跡No.1	甕	口縁部～胴部上半	(9.6)	〈5.6〉	―	70	内外面ヨコナデ後外面ハケ、内面ハケ後胴部ヘラケズリ。	胎土:砂粒少量、密 焼成:良好 色調:褐色	

計測値内()は推測値、〈〉は残存値を示す。

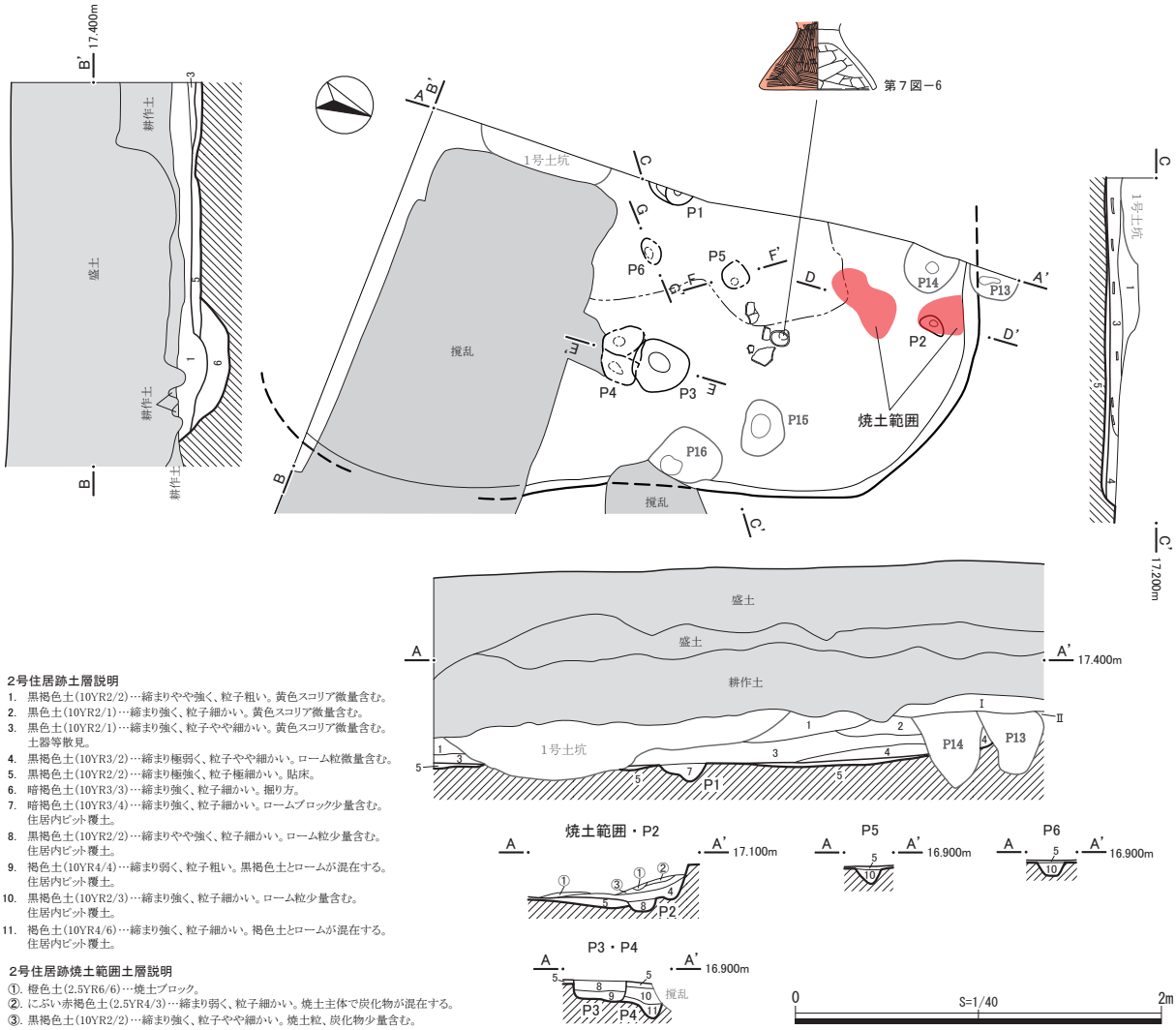
中央は素掘りである。部分的に貼床を施す。周溝は認められない。

調査範囲では炉は発見されなかった。ピットは床面から３基（Ｐ１～３）、掘り方から３基（Ｐ４～６）検出された。円形または楕円形の平面形をもち、径約 13 ～ 30cm、床面または掘り方底面からの深さが８～ 20cm を測る。

覆土は黄色スコリアを含む黒色及び黒褐色土が主体である。また、中央部から北側の床直上に焼土及び炭化物の集中が認められたが、周辺及び直下に被熱の痕跡はみられなかったため、投棄されたと考えられる。

遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期の壺 23 点（553 ｇ）･台付甕３点（1,383 ｇ）･高坏３点（498 ｇ）･鉢４点（61 ｇ）が出土し、本地点の中では最も遺物が出土した遺構である。また縄文土器１点（10 ｇ）が混入する。出土した土器片は小片が主体であり、竪穴部の北側と南側から散在した状態で出土する。この内６の高坏脚部は竪穴部北側の床面直上から出土した。

出土遺物のうち７点を図示した。１は厚手の壺の胴部片であり、竪穴部北側を中心に胴部片のみが破損した状態で出土した。２は単口縁ハケ調整の台付甕片であり、竪穴部の北側と南側から破損した状態で出土した。３は頸部外面に輪積痕を６段残す甕片であり、弥生時代後期の甕の特徴を示す。４は台付甕の脚部片であり、ナデ調整が施される。３・４は竪穴部南側から出土した。５は内外に赤彩が施される大ぶりの高坏片である。６は北側の床面直上出土の高坏脚部であり、逆位の状態で出土した。これに伴う体部片は確認され



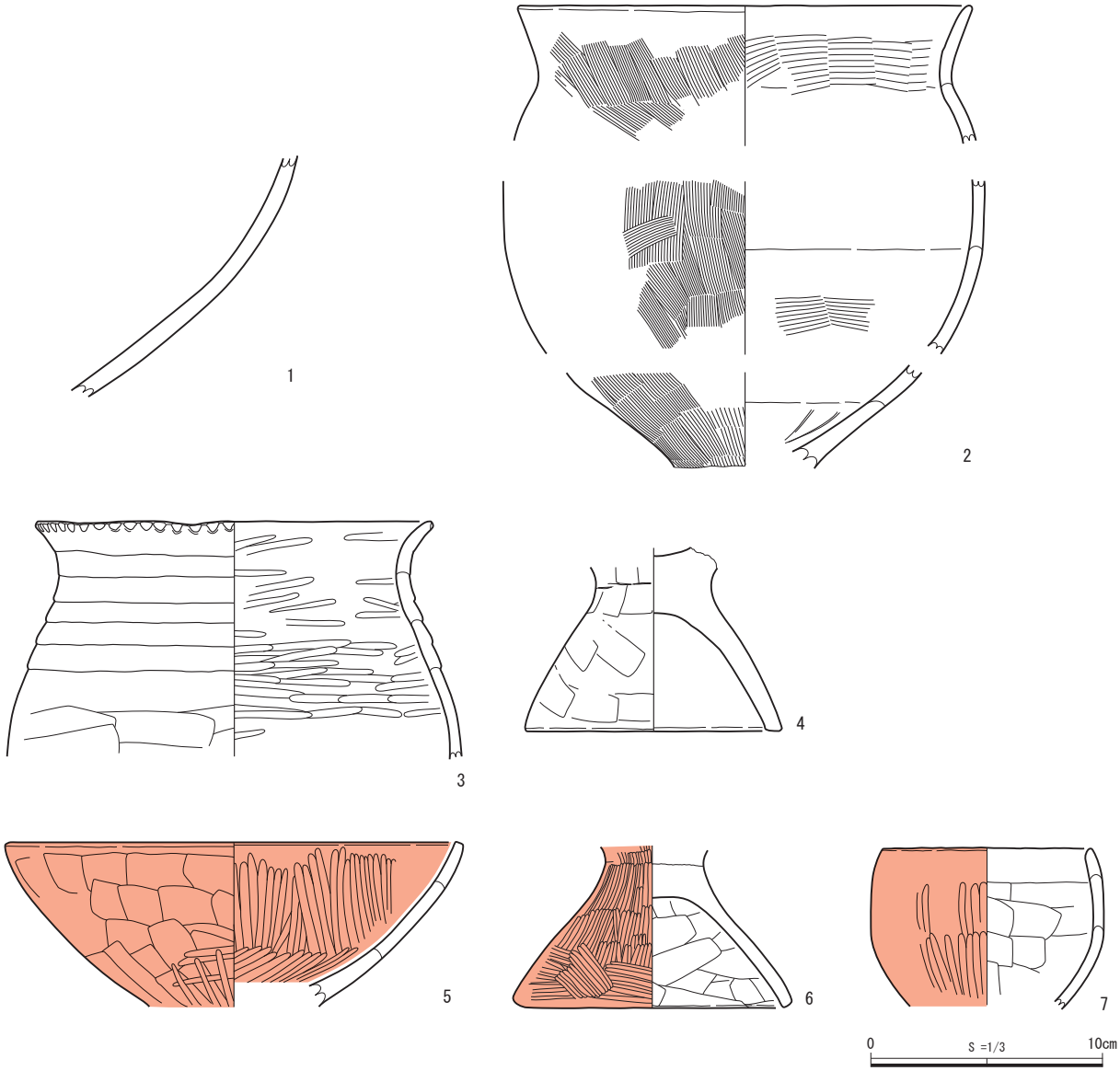
2号住居跡土層説明

1. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや強く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。
2. 黒色土(10YR2/1)…締まり強く、粒子細かい。黄色スコリア微量含む。
3. 黒色土(10YR2/1)…締まり強く、粒子やや細かい。黄色スコリア微量含む。土器等散見。
4. 黒褐色土(10YR3/2)…締まり極弱く、粒子やや細かい。ローム粒微量含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり極強く、粒子極細かい。貼床。
6. 暗褐色土(10YR3/3)…締まり強く、粒子細かい。掘り方。
7. 暗褐色土(10YR3/4)…締まり強く、粒子細かい。ロームブロック少量含む。住居内ピット覆土。
8. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや強く、粒子細かい。ローム粒少量含む。住居内ピット覆土。
9. 褐色土(10YR4/4)…締まり弱く、粒子粗い。黒褐色土とロームが混在する。住居内ピット覆土。
10. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり強く、粒子細かい。ローム粒少量含む。住居内ピット覆土。
11. 褐色土(10YR4/6)…締まり強く、粒子細かい。褐色土とロームが混在する。住居内ピット覆土。

2号住居跡焼土範囲土層説明

①. 橙色土(2.5YR6/6)…焼土ブロック。
②. にぶい赤褐色土(2.5YR4/3)…締まり弱く、粒子細かい。焼土主体で炭化物が混在する。
③. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり強く、粒子やや細かい。焼土粒、炭化物少量含む。

第６図　２号住居跡　平面図・土層断面図



第７図　２号住居跡　出土遺物

第２表　２号住居跡　出土遺物観察表

掲載No.	出土地点	器種	部位	計測値(cm) 口径	器高	底径	重量(g)	成形・調整等	胎土・焼成・色調	備考
1	2号住居跡 No.3・北側	壺	胴部	—	〈10.4〉	—	280	粘土帯積み後、外面ヨコ方向に粗くミガキ。	胎土:砂粒。小石微量。やや密 焼成:やや不良 色調:にぶい黄褐色	
2	2号住居跡 北側・南側	台付甕	口縁部～胴部下半	(19.6)	〈17.6〉	—	245	粘土帯積み後、ヨコナデ。外面ハケ。内面口縁部粗いヨコハケ。	胎土:砂粒少量、小石微量。やや粗 焼成:やや良好 色調:内面暗褐色	小破片に破損。
3	2号住居跡 南側	甕	口縁部～胴部上半	(17.2)	(10.1)	—	150	口縁部棒工具による連続押捺。頸部外面輪摘痕6段。胴部ヘラケズリ。内面やや粗くミガキ。	胎土:砂粒少量。やや粗 焼成:やや良好 色調:褐色	
4	2号住居跡	台付甕	胴部下半～脚部	—	〈7.9〉	11.0	160	内外面ヨコナデ後、外面粗くヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。	胎土:砂粒少量、小石微量。やや粗 焼成:良好 色調:内面暗褐色	胴部内面煤付着。 著しく欠損。
5	2号住居跡 北側	高坏	体部	(19.7)	〈7.0〉	—	153	ヨコナデ後、外面ヘラケズリ、下半ヘラミガキ。内面粗くミガキ。	胎土:砂粒微量。やや密 焼成:良好 色調:内外面赤い褐色、一部黒褐色	内外面赤彩。 大半剥離。
6	2号住居跡 No.5	高坏	脚部	—	〈7.0〉	(12.0)	260	内外面ヨコナデ後、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	胎土:砂粒少量、赤色粒子微量。やや密 焼成:良好 色調:外面にぶい赤褐色、内面暗褐色	外面赤彩。 坏部欠損。
7	2号住居跡 北側	鉢	口縁部～体部	—	(9.2)	〈6.8〉	40	外面タテヘラミガキ一部粗。内面ヘラケズリ。	胎土:砂粒、やや密 焼成:やや良好 色調:外面にぶい赤褐色、内面暗褐色	外面赤彩。

計測値内()は推測値、〈〉は残存値を示す。

ていない。７は小型の鉢の体部片であり竪穴部北側から出土した。

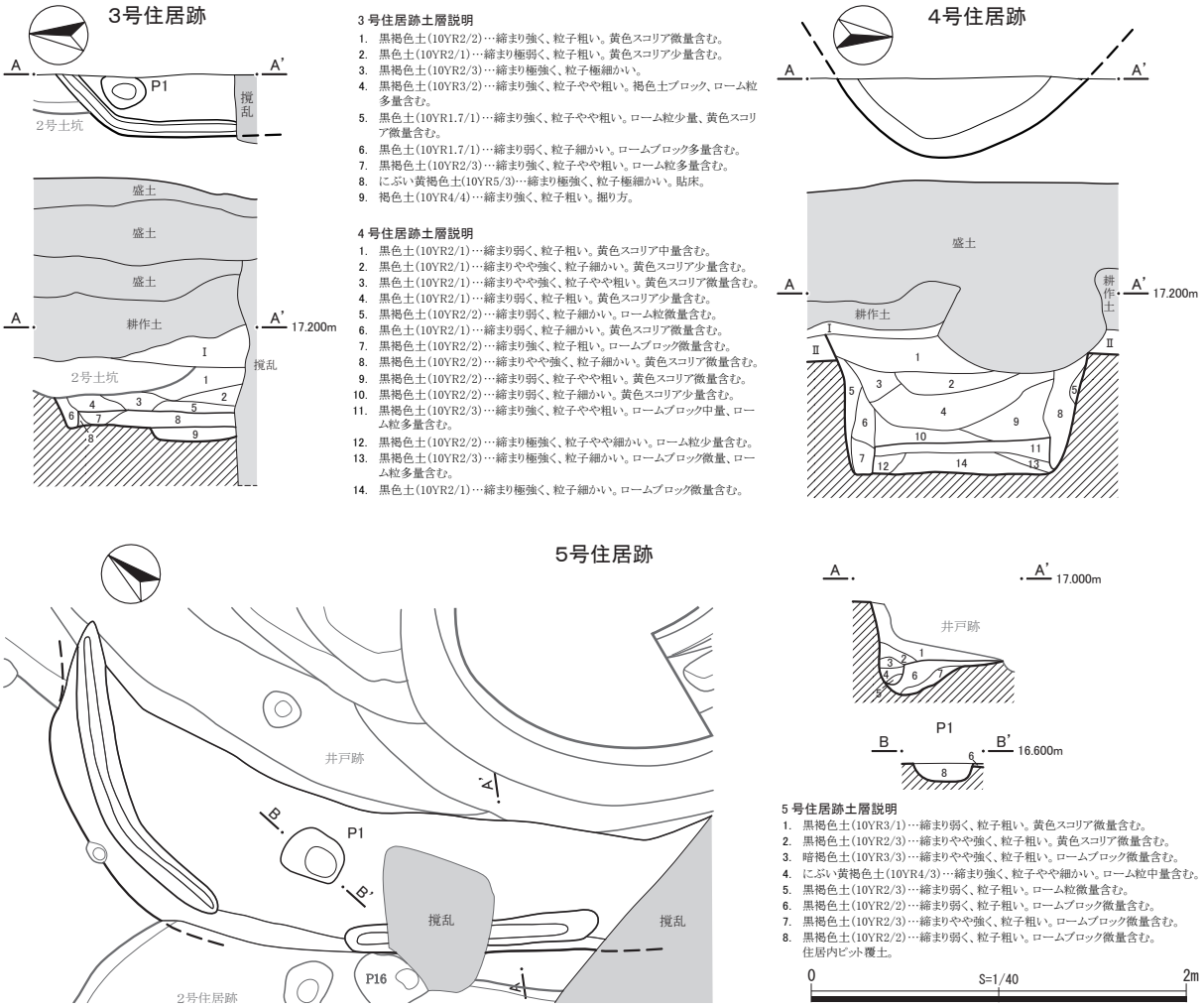
これらの図示した遺物の大半は古墳時代前期初頭の様相を示しており、少量であるが弥生時代後期の特徴を有するものが出土している。

３号住居跡（第８図、図版１・２）

調査区東壁際において検出された。２号土坑、撹乱に切られる。西側の一部のみの検出となるため、平面形は不明である。規模は東西 0.3 m以上、南北 1.0 m以上、遺構検出面から床面までの深さは 13cm を測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面は掘り方底面から 7cm の高さで構築されており、硬化する。掘り方の一部は周囲に比べ 7cm 程低くなる掘り込みが認められるが、詳細は不明である。周溝は検出された範囲において、幅 10cm、床面からの深さが 10cm の規模で認められた。

調査範囲では炉は発見されなかった。ピットは１基（Ｐ１）検出された。楕円形の平面形をもち、長軸 24cm、短軸約 17cm、床面からの深さが 17cm を測る。

覆土は黄色スコリアを含む黒色及び黒褐色土が主体である。掘り方の覆土は、にぶい黄褐色土を主体とした土層上面が床面となり（８層）、一段低い掘り込みには粒子の粗い褐色土が堆積する（９層）。



3 号住居跡土層説明

1. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり強く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。
2. 黒色土(10YR2/1)…締まり極弱く、粒子粗い。黄色スコリア少量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり極強く、粒子極細かい。
4. 黒褐色土(10YR3/2)…締まり強く、粒子やや粗い。褐色土ブロック、ローム粒多量含む。
5. 黒色土(10YR1.7/1)…締まり強く、粒子やや粗い。ローム粒少量、黄色スコリア微量含む。
6. 黒色土(10YR1.7/1)…締まり弱く、粒子細かい。ロームブロック多量含む。
7. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり強く、粒子やや粗い。ローム粒多量含む。
8. にぶい黄褐色土(10YR5/3)…締まり極強く、粒子極細かい。貼床。
9. 褐色土(10YR4/4)…締まり強く、粒子粗い。掘り方。

4 号住居跡土層説明

1. 黒色土(10YR2/1)…締まり弱く、粒子粗い。黄色スコリア中量含む。
2. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや強く、粒子細かい。黄色スコリア少量含む。
3. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや強く、粒子やや粗い。黄色スコリア微量含む。
4. 黒色土(10YR2/1)…締まり弱く、粒子粗い。黄色スコリア少量含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子細かい。ローム粒微量含む。
6. 黒色土(10YR2/1)…締まり弱く、粒子細かい。黄色スコリア微量含む。
7. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり強く、粒子粗い。ロームブロック微量含む。
8. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや強く、粒子細かい。黄色スコリア微量含む。
9. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子やや粗い。黄色スコリア微量含む。
10. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子細かい。黄色スコリア少量含む。
11. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり強く、粒子やや粗い。ロームブロック中量、ローム粒多量含む。
12. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり極強く、粒子やや細かい。ローム粒少量含む。
13. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり極強く、粒子細かい。ロームブロック微量、ローム粒多量含む。
14. 黒色土(10YR2/1)…締まり極強く、粒子細かい。ロームブロック微量含む。

5 号住居跡土層説明

1. 黒褐色土(10YR3/1)…締まり弱く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。
2. 黒褐色土(10YR2/3)…締まりやや強く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3)…締まりやや強く、粒子粗い。ロームブロック微量含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)…締まり強く、粒子やや細かい。ローム粒中量含む。
5. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
6. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。ロームブロック微量含む。
7. 黒褐色土(10YR2/3)…締まりやや強く、粒子粗い。ロームブロック微量含む。
8. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。ロームブロック微量含む。
住居内ピット覆土。

第８図　３・４・５号住居跡　平面図・土層断面図

遺物は出土しなかった。

４号住居跡（第８図、図版１・２）

調査区西壁際中央付近において検出された。南東または北東角部分のみの検出となるため平面形は不明である。当初は土坑とみられたが、断面観察にて硬化面及び周溝が確認されたため、竪穴住居跡とした。規模は東西 0.8 m以上、南北 1.0 m以上、遺構検出面から床面までの深さは 46cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘り方底面から約 11cm と 17cm の高さでそれぞれ硬化面が認められることから、床面が２面あった可能性がある。周溝は断面観察によって、幅 17 ～ 20cm、床面からの深さが 17cm の規模で認められた。

調査範囲では炉及びピットは発見されなかった。

覆土は黄色スコリアを含む黒色及び黒褐色土が主体である。掘り方の覆土は総じて硬く締まる。黒色及び黒褐色土を主体とし、ローム粒、ロームブロックが含まれる。

遺物は土器小片１点が出土したが、時期、器種共に不明である。

５号住居跡（第８図、図版１・２）

調査区南側において検出された。２号住居跡、井戸跡、撹乱に切られる。遺存状態が悪く、西側のみの検出となるが、平面形は隅丸方形と推察できる。規模は東西 1.8 m以上、南北 3.5 m以上、遺構検出面から床面までの深さは 31cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦だが軟弱である。掘り方は壁際を掘り込んでいる。一部途切れるが、北壁及び西壁際において周溝が検出された。規模は幅 15 ～ 19cm、床面からの深さは 13cm である。

炉は発見されなかった。ピットは１基（Ｐ１）検出された。楕円形の平面形をもち、長軸 32cm、短軸 26cm、床面からの深さが 9cm を測る。

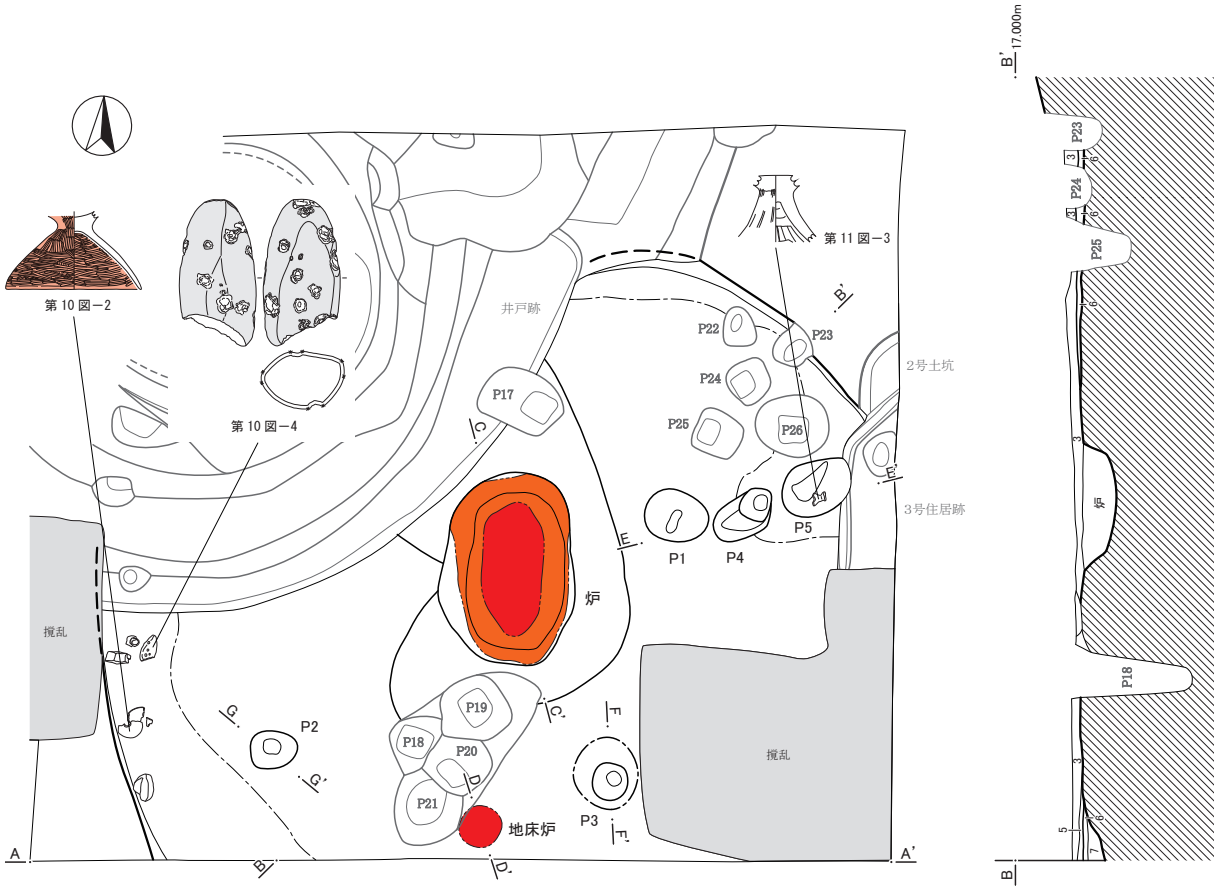
覆土は黄色スコリアを含む黒褐色土が主体である。掘り方の覆土は黒色及び黒褐色土を主体とし、ローム粒、ロームブロックが含まれる。

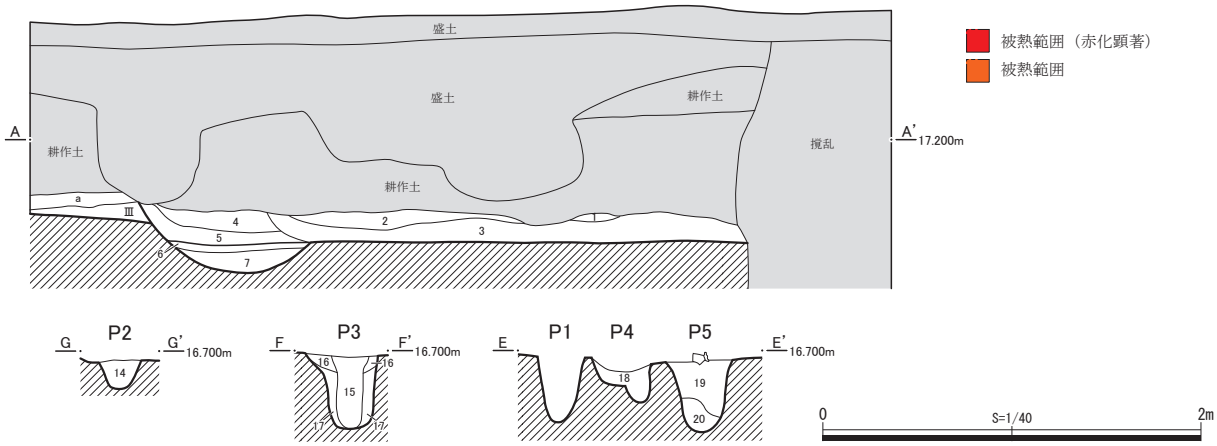
遺物は出土しなかった。

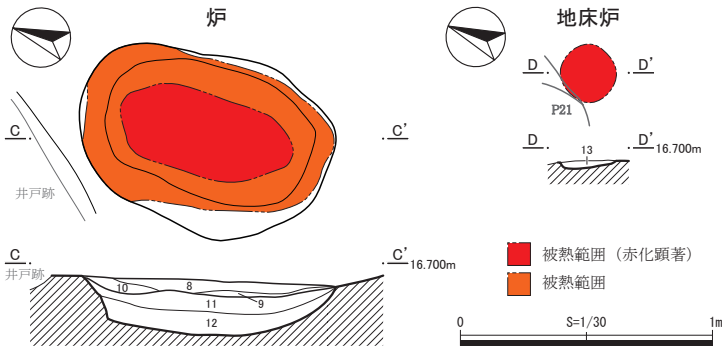
６号住居跡（第９・10 図、第３表、図版１・３・６）

調査区南東部分において検出された。３号住居跡、２号土坑、井戸跡、Ｐ 17 ～ 26、撹乱に切られる。南側は調査範囲外となる。平面形は隅丸方形を呈するとみられる。規模は東西 4.4 m以上、南北 3.5 m以上、遺構検出面から床面までの深さは 16cm を測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面は壁際を除き硬化する。また、炉の周囲では、炉に向って緩く落ち込んでいる。掘り方は壁際を掘り込み、中央は素掘りである。部分的に貼床を施す。周溝は認められない。

中央部北側に、平面形が南北に長い長楕円形を呈する炉を有する。規模は長軸 103cm、短軸 72cm、床面から火床面までの深さは 5cm である。全体的に被熱し、中央部分はより顕著である。火床面の直上には、灰の堆積が認められるが、炭化物は少ない。また、調査区南壁際の本遺構中央部分の床面が、直径 30cm 程の円形に被熱しており、地床炉と考えられる。ピットは５基検出された（Ｐ１～５）。平面形は楕円形を呈する。これらの内、Ｐ１・３・５は規模が長軸 32 ～ 38cm、短軸 28 ～ 34cm、床面からの深さが 35 ～ 40cm を測り、柱穴の可能性がある。特にＰ３については、床面及び断面において柱状の痕跡が認められ、ピットの掘り方の形状を確認したのは貼床を剥いだ後であった。但し、各ピットの配置状況を見ると、主柱穴と捉えること







6号住居跡土層説明

1. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや強く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。
2. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや強く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。
3. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり強く、粒子やや細い。黄色スコリア少量含む。
4. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや弱く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。
5. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや強く、粒子粗い。黄色スコリア少量含む。
6. 暗褐色土(10YR3/3)…締まり極強く、粒子細い。貼床。
7. 褐色土(10YR4/4)…締まり強く、粒子やや粗い。掘り方。
8. 黒色土(10YR2/1)…締まり強く、粒子細い。焼土粒多量、炭化物微量含む。
9. にぶい黄褐色土(10YR5/4)…締まり弱く、粒子極細い。焼土粒少量、灰主体。
10. 褐色土(10YR4/4)…締まり強く、粒子細い。焼土粒中量含む。
11. 暗赤褐色土(2.5YR3/6)…締まり極強く、粒子粗い。焼土主体。炉掘り方。
12. 暗赤褐色土(2.5YR3/6)…締まりやや弱く、粒子やや粗い。被熱ローム主体。炉掘り方。
13. 暗赤褐色土(2.5YR3/6)…締まり極強く、粒子細い。焼土。地床炉。
14. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや弱く、粒子細い。ローム粒中量含む。住居内P2覆土。
15. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや弱く、粒子細い。ローム粒中量含む。住居内P3覆土。
16. 黒色土(10YR1.7/1)…締まり極強く、粒子細い。ローム粒多量含む。住居内P3掘り方。
17. 暗褐色土(10YR3/3)…締まり弱く、粒子極粗い。ローム粒極多量含む。住居内P3掘り方。
18. 黒色土(10YR2/1)…締まり弱く、粒子細い。ローム粒少量含む。住居内P4覆土。
19. 黒色土(10YR2/1)…締まり弱く、粒子細い。ローム粒少量含む。住居内P5上層。
20. 黄褐色土(10YR5/8)…締まりやや弱く、粒子細い。ローム主体。住居内P5下層。

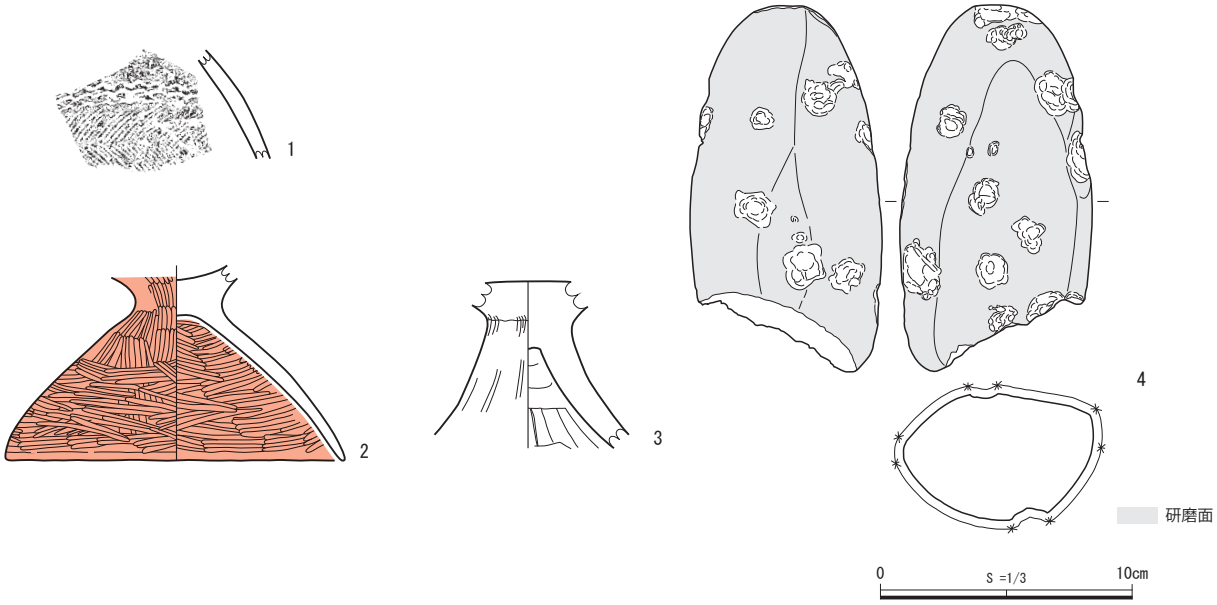
第９図　６号住居跡　平面図・土層断面図

は難しい。

遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期の壺７点（37 ｇ）・高坏７点（339 ｇ）・敲石１点（775 ｇ）、礫10 点（1,900 ｇ）が出土した。土器片は全体に小片であり散在した状態で出土している。この内、高坏脚部（２）と敲石（４）は西壁際側の床面直上から出土した。

この内図示したのは４点である。１は壺の胴部上半片であり、S 字状結節文と羽状細縄文が施される。器面は磨耗しており、これの同一個体は出土していない。２は内外面に赤彩が施された高坏脚部片であり、西壁際側の床面直上より、逆位の状態で出土した。３はＰ５覆土上面より出土した高坏脚部片であり、やや円筒形状である。４は西壁際側の床面直上から出土した敲石である。器面が全体的に研磨されており、磨石として使用した後に敲石として転用したと想定される。

これらの図示した遺物の大半は古墳時代前期初頭の様相を示しており、少量であるが弥生時代後期の特徴を有するものが出土している。



第 10 図　６号住居跡　出土遺物

第３表　６号住居跡　出土遺物観察表

掲載No.	出土地点	器種	部位	計測値(cm) 口径	器高	底径	重量(g)	成形・調整等	胎土・焼成・色調	備考
1	6号住居跡	壺	胴部上半	―	〈4.3〉	―	22	ヨコナデ後、S字状結節文、羽状細縄文。	胎土:砂粒。やや粗 焼成:やや不良 色調:褐色	器面磨耗し調整不明瞭。
2	6号住居跡 №2	高坏	胴部下半 ～ 脚部	―	〈7.9〉	13.4	175	ヨコナデ後、外面ヘラミガキ。下部粗い。	胎土:砂粒微量、密 焼成:やや良好 色調:内面にぶい赤褐色、一部暗褐色	内外面赤彩。
3	6号住居跡 №1	高坏	脚部	(17.2)	(10.1)	―	128	ヨコナデ後、内外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ痕粗く残る。	胎土:砂粒。小石微量。やや粗 焼成:やや不良 色調:にぶい褐色	器面磨耗し調整不明瞭。
4	6号住居跡 №4	石器	敲石	長さ 〈14.9〉	幅 7.2	厚さ 4.9	755	表面全体を研磨後、表・裏・側面先端に凹状の打痕。	硬質	磨石後敲石に転用。

計測値内()は推測値、〈〉は残存値を示す。

土坑

１号土坑（第 11・12 図、第４表、図版４・６）

調査区南西隅において検出された。撹乱に切られ、２号住居跡を切る。西側は調査範囲外となる。平面形は楕円形を呈するとみられるが定かではない。規模は東西 0.3 m以上、南北 1.9 m以上、遺構検出面から底面までの深さは 20cm を測る。北側にテラス状の段差があり、段差の底面には、ローム土が貼られていた。

この段差は２号住居跡の覆土上に造られており、軟弱な地盤であったためか、ローム土で補強していたとみられる。本体底部の北側には、弱い被熱が認められたが焼土及び炭化物は見受けられなかった。

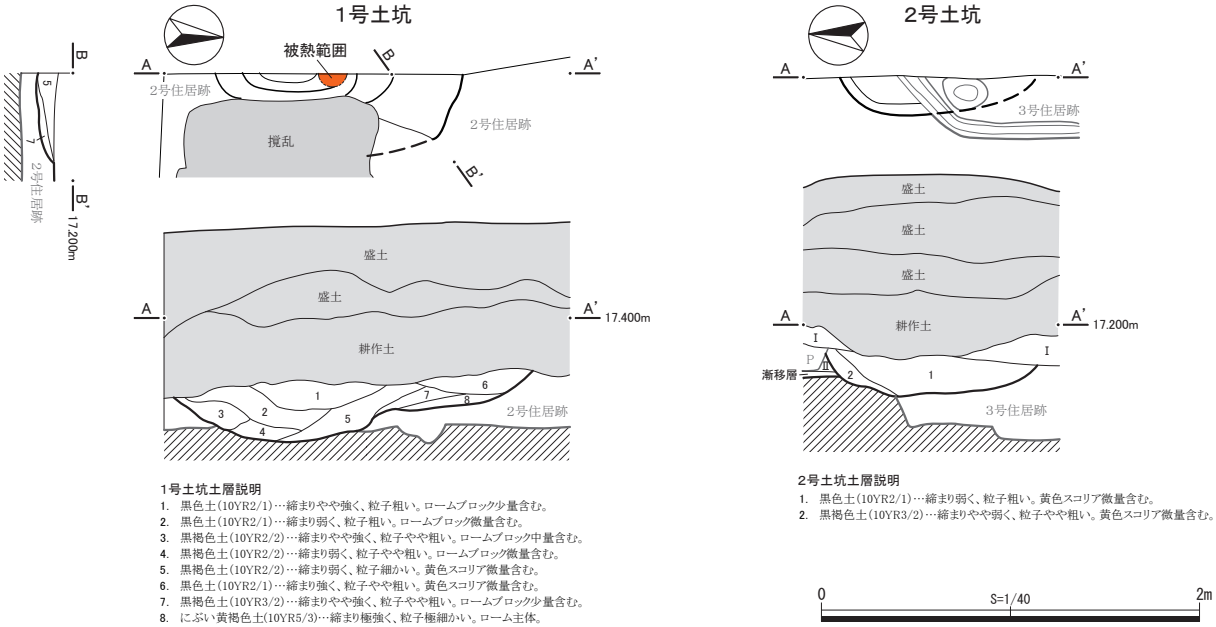
遺物は弥生時代後半から古墳時代前期の壺４点（1,646 ｇ）・甕１点（50 ｇ）・鉢１点（12 ｇ）が出土した。１は頸部外面に輪積痕を６段残す甕片であり、２号住居跡出土遺物と接合する。２は鉢の体部下半片であり、焼成前に穿孔が施される。

これらの出土遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の特徴を有するが、２号住居跡から混入したことも考えられる。

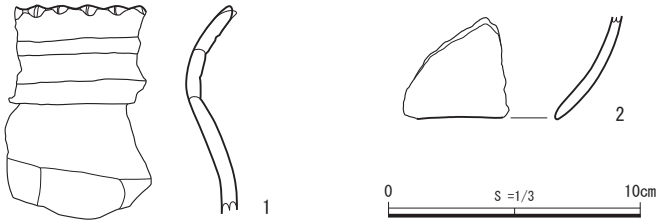
２号土坑（第 11・13 図、第５表、図版４・６）

調査区東壁際において検出された。ピットに切られ、３・６号住居跡を切る。東側は調査範囲外となる。平面形は楕円形を呈するとみられるが定かではない。規模は東西 0.2 m以上、南北 1.1 m以上、遺構検出面から底面までの深さは 10cm を測る。

遺物は須恵器甕１点（50 ｇ）、礫４点 720 ｇが出土した。１の須恵器胴部片は叩き目と当て具の様相から古墳時代後期の所産と推測され、本遺構に混入したもの想定される。



第 11 図　１・２号土坑　平面図・土層断面図

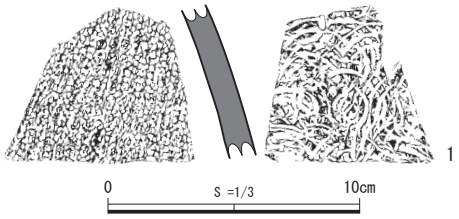


第 12 図　１号土坑　出土遺物

第４表　１号土坑　出土遺物観察表

掲載No.	出土地点	器種	部位	計測値(cm)			重量(g)	成形・調整等	胎土・焼成・色調	備考
				口径	器高	底径				
1	1号土坑・2号住居跡	甕	口縁部～胴部	－	〈8.2〉	－	50	口縁部棒工具による連続押捺。頸部外面輪摘痕4段。胴部下半ヘラケズリ。内面ヘラケズリ。	胎土:砂粒、やや密 焼成:やや不良 色調:褐色	
2	1号土坑	鉢	口縁部～体部	－	〈5.1〉	－	12	ヨコナデ後、焼成前穿孔。	胎土:砂粒、やや密 焼成:やや良好 色調:にぶい褐色	器面磨耗し調整不明瞭。

計測値内()は推測値、〈〉は残存値を示す。



第 13 図　２号土坑　出土遺物

第５表　２号土坑　出土遺物観察表

掲載No.	出土地点	器種	部位	計測値(cm)			重量(g)	成形・調整等	胎土・焼成・色調	備考
				口径	器高	底径				
1	2号土坑	須恵器甕	胴部	－	5.0	－	75	外面格子状タタキ。内面青海波のあて具痕。	胎土:砂粒、やや密 焼成:やや不良 色調:褐色	

計測値内()は推測値、〈〉は残存値を示す。

第２節　中世以降の遺構と遺物

井戸跡（第 14・15 図、第６表、図版１・４・６）

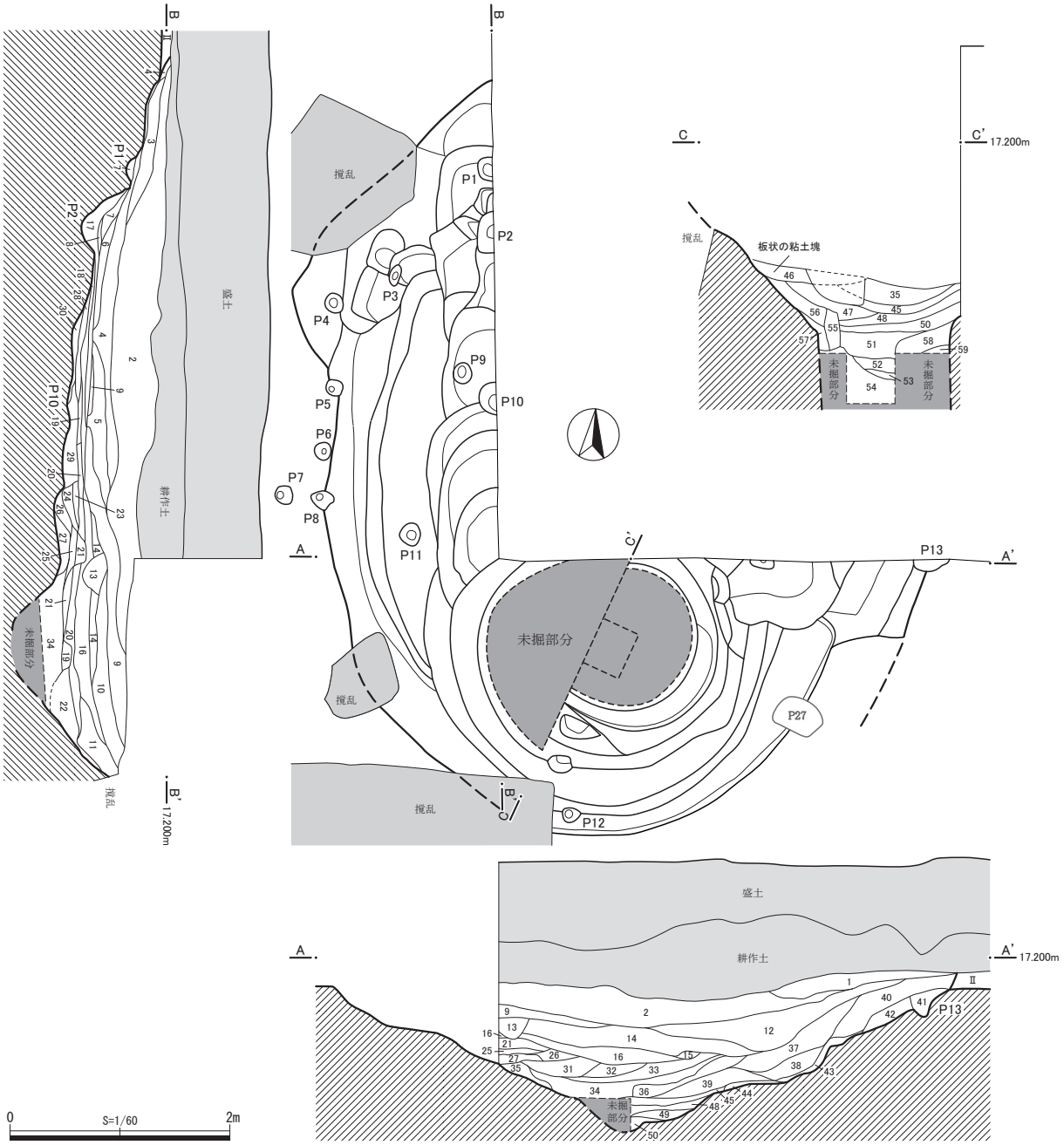
調査区南側中央部分において検出された。撹乱に切られ、５・６号住居跡を切る。北東部分は調査範囲外となる。平面形は小判形を呈する。規模は東西 6.0 m以上、南北 6.9 m以上、遺構検出面からの深さは 1.3 m以上を測る。いわゆる階段式の井戸跡である。

井戸部分は遺構の南側となる。壁の上部は緩く傾斜し、途中から平面形が円形で径 1.2 mの規模となってほぼ垂直に落ちる。南壁及び東壁では、足掛け用と考えられる段差が認められた。なお、作業の危険を鑑み、完掘には至らなかった。

階段部分は遺構の北側となり、南側の井戸部分に降りる構造である。それぞれの段差は低く、造りは粗いと言える。各段の平坦面には数枚の硬化面が認められ、井戸が継続的に使用されていたことが窺える。また、平面形が円形または楕円形を呈し、径約 15 ～ 20cm、深さ約 10 ～ 20cm のピットが 13 基（Ｐ１～ 13）検出された。これらは規模や形状の他、覆土が非常に硬く締まった黒褐色土であるといった特徴が酷似している。井戸の付帯施設と考えられるが、用途は不明である。

覆土は、黒色あるいは黒褐色土を主体とした中に、砂質粘土が塊として混入する層が数箇所みられた。これについて、遺構の西壁の一部では、５号住居跡の覆土を壊して構築されているが、軟弱な地盤であったためかこの範囲ではローム土や砂質粘土等で壁を補強していたとみられる痕跡が確認されており、この補強材が拡散したと考えられる。また、台形状の平面形をもち板状を呈する、長さ 1.1 m、幅 0.8 m、厚さ 15cm の粘土塊が、井戸部分の覆土中で検出された。検出状況からみて、本遺構の構築材とは考え難く、井戸部分の埋没過程において遺棄されたものと考えられる。

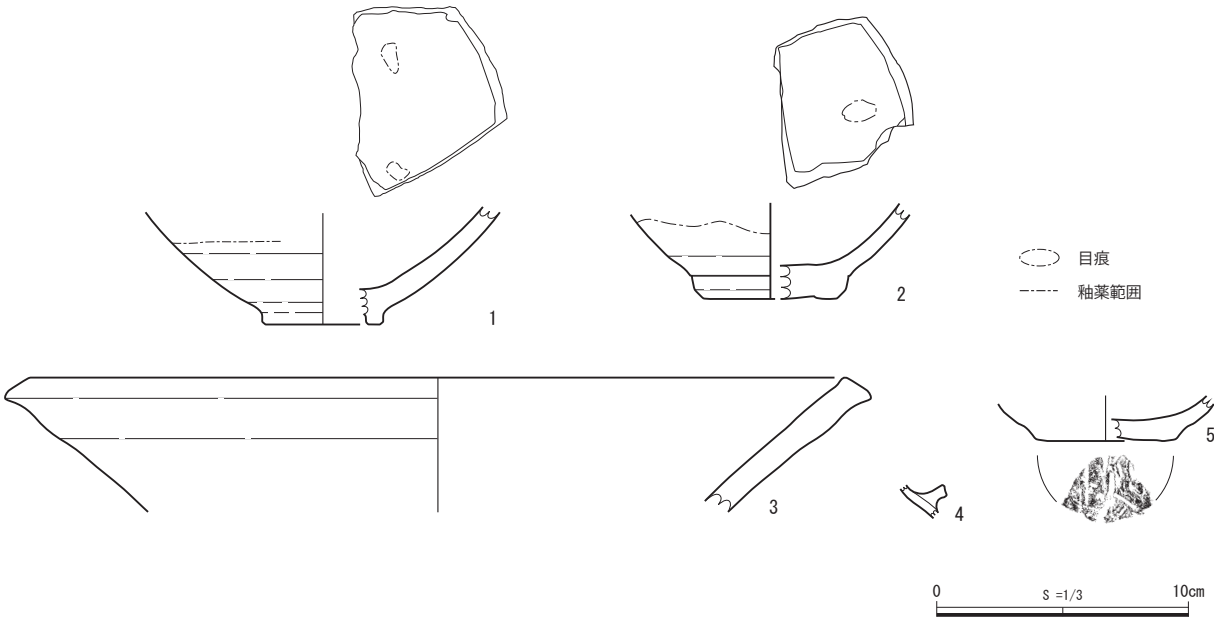
遺物は中世の陶器３点（124 g）・炻器２点（241 g）・土器５点（39 g）、礫 19 点（8,100 g）が出土した。また弥生時代後期後半から古墳時代前期の壺 28 点（274 g）・甕７点（53 g）、縄文土器１点（10 g）が混



井戸跡土層説明

1. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒微量含む。耕作土？
2. 黒色土(10YR2/1)…締まり弱く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。耕作土？
3. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。耕作土？
4. 黒色土(10YR2/1)…締まり弱く、粒子粗い。黄色スコリア少量含む。
5. 黒色土(10YR1.7/1)…締まりやや強く、粒子粗い。
6. 黒褐色土(10YR3/2)…締まりやや強く、粒子やや細い。褐色土混在。
7. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや強く、粒子やや細い。ローム粒微量含む。
8. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり強く、粒子細い。褐色土混在。
9. 黒褐色土(10YR3/1)…締まりやや強く、粒子細い。ローム粒、酸化鉄粒微量含む。
10. 黒褐色土(10YR2/3)…締まりやや強く、粒子粗い。砂質粘土中量含む。粘土はブロック状。
11. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや強く、粒子やや細い。酸化鉄粒微量含む。
12. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。酸化鉄粒、砂粒微量含む。
13. 黒色土(10YR2/1)…締まり極弱く、粒子極粗い。ビット状。
14. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや強く、粒子粗い。ローム粒少量含む。
15. 黒褐色土(10YR3/1)…締まりやや強く、粒子粗い。砂質ローム多量含む。
16. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや強く、粒子粗い。
17. 黒褐色土(10YR3/2)…締まりやや強く、粒子やや細い。褐色土、ロームブロック少量含む。
18. 黒褐色土(10YR3/2)…締まり極強く、粒子極細い。褐色土少量含む。顕著な硬化。
19. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり極強く、粒子極細い。顕著な硬化。
20. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり強く、粒子細い。
21. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや強く、粒子細い。粘土粒、酸化鉄粒微量含む。
22. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。粘土粒、酸化鉄粒微量含む。
23. 暗褐色土(10YR3/3)…締まり強く、粒子やや粗い。黒褐色土と褐色土混在。
24. 黒褐色土(10YR3/2)…締まり強く、粒子やや粗い。
25. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒少量、黄色スコリア微量含む。
26. 黒色土(10YR2/1)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
27. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや強く、粒子やや粗い。ローム粒微量含む。
28. 暗褐色土(10YR3/3)…締まり極強く、粒子極細い。褐色土混在含む。顕著な硬化。
29. 黒褐色土(10YR3/1)…締まり極強く、粒子極細い。顕著な硬化。
30. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり極強く、粒子極細い。褐色土少量含む。顕著な硬化。
31. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり強く、粒子粗い。酸化鉄粒微量含む。
32. 黒褐色土(10YR3/1)…締まり弱く、粒子粗い。粘土粒少量、黄色スコリア微量含む。
33. 黒褐色土(10YR2/3)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
34. 黒褐色土(10YR3/1)…締まりやや強く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
35. 暗褐色土(10YR3/3)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
36. 黒褐色土(10YR2/3)…締まりやや強く、粒子粗い。砂質粘土多量、小礫少量含む。粘土はブロック状。
37. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。黄色スコリア微量含む。
38. 黒色土(10YR2/1)…締まりやや弱く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
39. 黒褐色土(10YR3/1)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
40. 黒褐色土(10YR2/3)…締まりやや弱く、粒子粗い。ローム粒少量含む。
41. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒少量含む。ビット状。
42. 暗褐色土(10YR3/3)…締まりやや強く、粒子粗い。ローム粒多量含む。
43. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
44. 褐色土(10YR4/4)…締まり極強く、粒子細い。ロームブロック多量含む。顕著な硬化。
45. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり強く、粒子細い。粘土粒少量、酸化鉄粒多量含む。顕著な硬化。
46. 褐灰色土(10YR6/1)…締まり強く、粒子やや粗い。酸化鉄粒微量含む。板状の粘土塊。
47. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや強く、粒子粗い。粘土粒微量含む。
48. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり弱く、粒子粗い。ロームブロック、小礫微量含む。
49. 暗褐色土(10YR3/3)…締まり弱く、粒子粗い。粘土粒少量、小礫、砂粒中量含む。
50. にぶい黄褐色土(10YR4/3)…締まり極強く、粒子粗い。砂質粘土主体で黒褐色土混在。
51. 灰黄褐色土(10YR5/2)…締まり極弱く、粒子細い。砂質粘土主体、ロームブロック微量含む。
52. 黒褐色土(10YR3/2)…締まりやや強く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
53. 灰黄褐色土(10YR4/2)…締まりやや強く、粒子粗い。砂質粘土主体で黒褐色土混在。
54. 褐灰色土(10YR5/1)…締まりやや強く、粒子粗い。砂質粘土主体、ロームブロック多量含む。
55. 黒褐色土(10YR2/2)…締まり強く、粒子粗い。ローム粒微量含む。
56. 黒褐色土(10YR2/2)…締まりやや強く、粒子細い。ローム粒微量含む。
57. 暗褐色土(10YR3/3)…締まりやや強く、粒子粗い。ロームブロック多量含む。
58. 灰白色土(10YR7/1)…締まり極弱く、粒子細い。砂質粘土主体。
59. にぶい黄橙色土(10YR7/2)…締まり強く、粒子細い。砂質粘土とローム混在。

第 14 図　井戸跡　平面図・断面図



第 15 図　井戸跡　出土遺物

第６表　井戸跡　出土遺物観察表

掲載No.	出土地点	器種	部位	計測値(cm) 口径	器高	底径	重量(g)	成形・調整等	胎土・焼成・色調	備考
1	井戸跡 №15	灰釉陶器 碗	体部～底部	－	〈4.5〉	(4.8)	60	体部内面～外面上半に灰釉。内面目跡2箇所。高台部貼り付け。	胎土:砂粒。やや密 焼成:良好 色調:褐灰色	瀬戸美濃産。
2	井戸跡	灰釉陶器 碗	体部～底部	－	〈3.8〉	(5.3)	52	体部内面に灰釉。内面目跡1箇所。高台部貼り付け。	胎土:砂粒。やや密 焼成:やや不良 色調:褐灰色	瀬戸美濃産。
3	井戸跡 南西部	炻器 捏鉢	口縁部	(14.4)	〈5.3〉	－	151	内外面ヨコナデ調整。	胎土:砂粒。白色小石微量。やや密 焼成:良好 色調:にぶい褐色	常滑産。
4	井戸跡 南中央部	土器 羽釜	口縁部	－	〈1.3〉	－	10	口縁部内傾し、鍔は貼り付け。	胎土:小石含。緻密 焼成:良好 色調:黄白色	南伊勢型の甕。 小片のため穿孔不明瞭。
5	井戸跡	土器 かわらけ	体部～底部	－	〈1.8〉	(5.4)	22	底部糸切り。内底面にヨコナデ。	胎土:砂粒。やや密 焼成:やや不良 色調:褐灰色、明褐色	

計測値内()は推測値、〈〉は残存値を示す。

入している。

図示したのは５点である。１・２は瀬戸美濃産の灰釉碗である。３は炻器で常滑産捏鉢である。４は薄手の羽釜片であり、南伊勢産の可能性が高い。５はかわらけ片であり、底部糸きり痕が残るが全体に器面が磨耗しており不明瞭である。これらは 15・16 世紀の中世後半のものが主体を占める。

また井戸跡周辺の耕作土からは中世の陶器２点（22 ｇ）・炻器捏鉢３点（154 ｇ）・転用砥石１点（38 ｇ）、礫 14 点（780 ｇ）が出土しており、これらは本遺構に伴う遺物と想定される。

第Ⅲ章　調査のまとめ

今回の調査地点において、主な遺構として弥生時代の住居跡６軒と中世の井戸跡１基が検出された。１・２・６号住居跡ではそれぞれ弥生時代後期後半から古墳時代前期の台付甕や高坏等が出土しており、同時期の遺構であると考えられる。３・４・５号住居跡については、覆土の様相及び周辺の調査例から弥生時代の住居跡と捉えたが、大半が調査範囲外に及び、また、井戸跡、撹乱に切られる等遺存状態が悪く、遺物も出

土していないため、詳細な時期等の判断は難しい。よって、比較的遺存が良好であり、出土遺物が得られた１・２・６号住居跡についてみていきたいと思う。

１号住居跡は西側が調査範囲外となるが、概ね規模や時期を捉えることができる。平面形は隅丸方形を呈するとみられ、一辺の長さが共に３ｍ未満の小振りな住居跡である。周溝は全周する。地床炉のような小規模な炉をもつ。ピットは８基検出されたが、柱穴とみられるものはない。遺物は覆土の中・下層から、本報告で掲載した台付甕等、古墳時代前期初頭の特徴を示す物が出土している。

２号住居跡は西側及び南側が調査範囲外となり、撹乱に切られる。このため全容は明らかではないが、一辺の長さが４ｍ前後で平面形が隅丸方形であることが想定される。周溝はなく、炉も検出されなかった。ピットは６基検出されたが、その内３基は掘り方による。１号住居跡のピット同様小規模で、柱穴とみられるものはない。遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期の壺・台付甕・高坏・鉢が出土したが、大半は小片である。本地点の中では最も遺物が出土した遺構である。

６号住居跡は南側が調査範囲外となる。平面形は隅丸方形を呈するとみられ、規模は東西 4.4 ｍ以上、南北 3.5 ｍ以上である。住居跡中央部北側に平面形が長楕円形を呈する炉が検出された他、地床炉と考えられる被熱範囲も認められた。ピットは５基検出され、Ｐ１・３・５は柱穴の可能性があるが、配置状況を見ると、主柱穴とは言い難い。遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期の壺・高坏の他、敲石等が出土した。土器片は全体に小片であり散在した状態で出土している。

この様に、１・２・６号住居跡では主柱穴や貯蔵穴はみられないものの、これまでに久ヶ原遺跡で発見された住居跡の特徴と大きな差異はなく、本地点が集落域に含まれることを示している。

久ヶ原遺跡は、近代以降、畑地から整然と区画された個人住宅の密集地へと移り変わる中、大規模な開発がほとんど行なわれないまま現在に至っており、広範囲に及ぶ発掘調査はあまりないと言える。しかし、これまでの調査を通じて、方形周溝墓（久が原六丁目 11 番地点他）や環濠（久が原五丁目 27 番地点他）、そして多数に及ぶ住居跡が発見されており、弥生時代後期後半の集落における土地利用の在り様が明らかとなってきている。具体的には、久が原台の台地中央部に墓域（方形周溝墓群）があり、それを取り囲む様に台地の縁辺部付近が居住域となることである。また、谷戸を挟んだ北側と西側の台地〔久原小学校内遺跡（大田区遺跡№.143）・嶺遺跡（大田区遺跡№.84）〕でも、弥生時代後期後半の集落跡が発見されている。

今回の調査地点は、北に久原小学校内遺跡のある台地を臨む谷戸の南側の台地上に位置しており、久ヶ原遺跡の北限にあたる。遺跡範囲としては、弥生時代後期後半の集落の北西域に位置付けられるが、本調査地点の周辺（第２図）の調査例をみると、久が原四丁目 22 番 12 号地点、久が原四丁目 24 番 14 号地点、久が原四丁目 27 番 4 号地点、久が原四丁目 30 番 12 号地点、久が原四丁目 39 番 2 号地点、久が原四丁目 40 番 19 号地点で各１軒、久が原四丁目 41 番 3 号地点で２軒の弥生時代後期後半の住居跡が発見されており、今回の調査において発見された住居跡６軒を含め、14 軒となる。それぞれの調査地点は散在すると言えるが、これら住居跡の軒数（密度）を考えると、居住域は北側に更に拡がり、久原小学校内遺跡のある台地まで及ぶ可能性がある。このことは、これまで久ヶ原遺跡は弥生時代後期後半の拠点集落で、久原小学校内遺跡はその派生集落との見解もあったが、久が原台周辺域は谷戸を含めた台地上に拡がる、ひとつの大きな集団の居住地であった可能性を示すとも言える。

何れにしても久ヶ原遺跡及びその周辺における資料は未だ乏しく、全容を解明するには更なる発見に期待することとなる。先に触れた「大きな集団の居住地」についても、墓域や環濠との位置関係等を踏まえた考察が必要となる。現在の土地利用の性格上、今後も地道な調査が続くと思われるが、資料の蓄積を進め、久ヶ

原遺跡及び周辺域における大集落の景観が明らかとなる様望むものである。

最後に僅かながら井戸跡に触れておく。遺物は陶器碗、炻器捏鉢、かわらけ、羽釜が出土しており、全て中世（15･16 世紀）の物と位置付けられる。この時期における井戸跡は、周辺域では初めての発見例となる。中世の遺構・遺物については遺跡全体でみても寡少ではあるが、久が原四丁目 27 番地点と久が原五丁目 27 番地点において竪穴状遺構が発見されており、出土遺物の特徴から、これらは本地点の井戸跡と概ね時期が重なると考えられる。また、久原小学校内遺跡（久が原四丁目 8 番 11 号地点）で発見された道路状遺構等の存在を含め、今後、中世における遺跡の在り様にも注視する必要があろう。

＜参考文献＞

大田区教育委員会　2007『久ヶ原遺跡Ⅰ　山王遺跡Ⅰ　大森射的場跡横穴墓群Ⅱ』大田区の埋蔵文化財　第 18 集

大田区教育委員会　2008『久ヶ原遺跡Ⅱ　嶺遺跡Ⅰ　山王遺跡Ⅱ　新居里横穴墓群Ⅱ　発掘調査報告』大田区の埋蔵文化財　第 19 集

大田区教育委員会　2011『久ヶ原遺跡Ⅲ　山王遺跡Ⅲ　発掘調査報告』大田区の埋蔵文化財　第 20 集

大田区教育委員会　2013『久ヶ原遺跡Ⅳ　丸山遺跡Ⅰ　山王遺跡Ⅳ　下沼部貝塚Ⅰ　稲荷森遺跡Ⅰ　発掘調査報告』大田区の埋蔵文化財　第 21 集

大田区久が原グリーンハイツ内遺跡発掘調査団　1999『久が原グリーンハイツ内遺跡－大田区久が原五丁目 27 番所在遺跡の発掘調査－（弥生時代以降編）』

株式会社四門　2006『久原小学校内遺跡（久が原四丁目 8 番 11 号地点）』

大成エンジニアリング株式会社　2008『久ヶ原遺跡（久が原六丁目 11 番 6 号地点）』

株式会社武蔵文化財研究所　2010『久ヶ原遺跡（久が原五丁目 18 番地点）』

野本孝明　1999「Ｖ－１タイプサイトの実像－久ヶ原遺跡－」『文化財の保護　第 31 号』特集「弥生時代の東京」東京都教育委員会

比田井克仁　2004『古墳出現期の土器交流とその展開』雄山閣

シンポジウム南関東の弥生土器実行員会編　2005『考古学リーダー５　南関東の弥生土器』六一書房

図　版　1

1.1号住居跡　検出状況（東から）

2.2・3・5・6号住居跡、井戸跡　検出状況（南西から）

3.2・4・5号住居跡、井戸跡　検出状況（北西から）

4．調査区　作業風景　（南東から）

5.1号住居跡　使用面全景（東から）

6.1号住居跡　東西セクション（北から）

7.1号住居跡　炉　東西セクション（南東から）

8.1号住居跡　甕（第5図－2）出土状況（北西から）

図　版　2

1．2号住居跡　使用面全景（東から）

2．2号住居跡　焼土及び炭化物集中範囲（南東から）

3．2号住居跡　高坏脚部（第7図－8）出土状況（南東から）

4．2号住居跡　掘り方全景（北東から）

5．3号住居跡　使用面全景（南から）

6．4号住居跡　掘り方全景（東から）

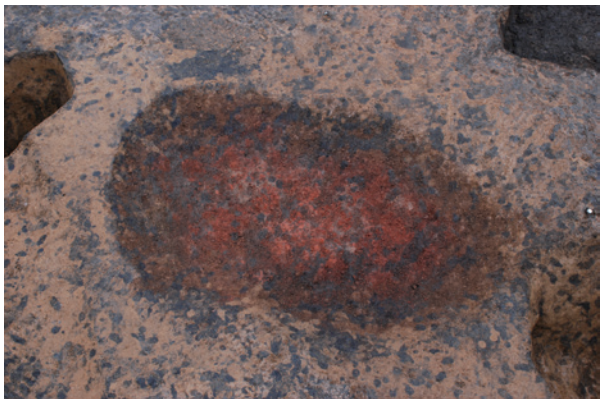
7．5号住居跡　使用面全景（南西から）

8．5号住居跡　東西セクション（南から）

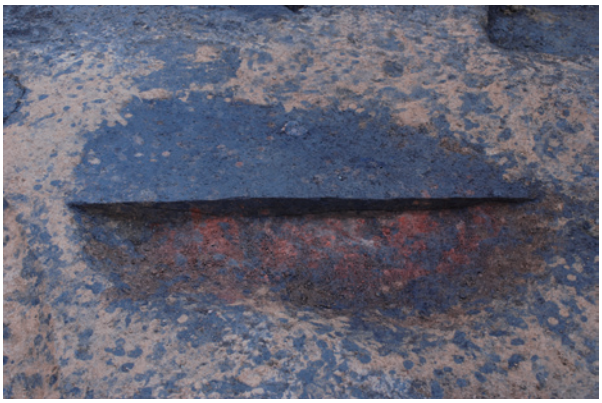
図　版　3

1.6号住居跡　使用面全景（南から）

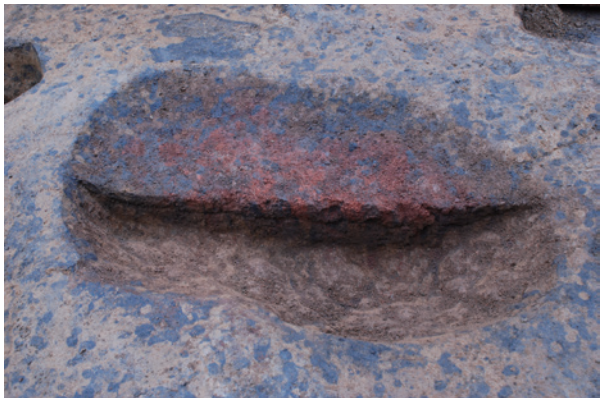
2.6号住居跡　使用面全景（北西から）



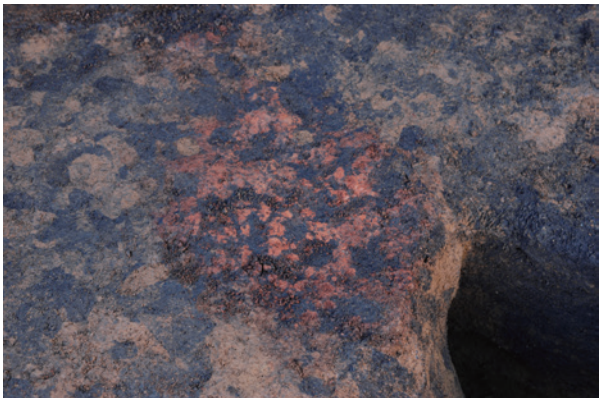
3.6号住居跡　炉　全景（西から）



4.6号住居跡　炉　南北セクション（西から）



5.6号住居跡　炉　掘り方　南北セクション（西から）



6.6号住居跡　地床炉　検出状況（北東から）

7.6号住居跡　遺物出土状況（東から）

8.6号住居跡　作業風景（北東から）

図　版　4

1. 1号土坑　全景（東から）

2. 1号土坑　底部被熱部分（東から）

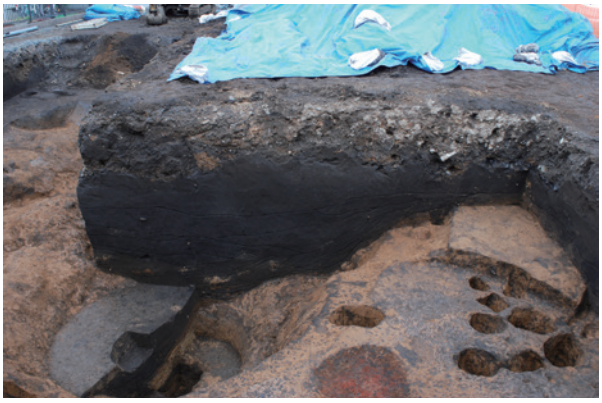
3. 井戸跡　全景（南から）

4. 井戸跡　粘土検出状況（南から）

5. 井戸跡　粘土検出状況（西から）

6. 井戸跡　下部　南北セクション（東から）

7. 井戸跡　東壁セクション（西から）



8. 井戸跡　北壁セクション（南から）

図 版 5

図　版　6

報告書抄録

ふりがな	みなみくがはらにちょうめよんばんよこあなぼ　いち　くがはらいせき　ろく　はっくつちょうさほうこく		
書名	南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ　久ヶ原遺跡Ⅵ　発掘調査報告		
シリーズ名	大田区の埋蔵文化財	巻次	２３集
編集者名	板垣　徹・長岡朋人・平田和明・伝田郁夫・門内政広		
編集発行機関名	大田区教育委員会　大田図書館　文化財担当		
所在地	〒143-0025　東京都大田区南馬込五丁目 11 番 13 号（大田区立郷土博物館内）　℡ 03-3777-1281		
発行年月日	西暦 2017 年３月 31 日		

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
南久が原二丁目４番横穴墓（みなみくがはらにちょうめ よんばんよこあなぼ）	東京都大田区南久が原二丁目４番（とうきょうとおおたく みなみくがはらにちょうめ ばん）	13111	236	35°34′38″	139°41′14″	20130521～20130528	約 3.44 ㎡	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南久が原二丁目４番横穴墓	横穴墓	古墳時代後期～奈良時代	横穴墓１基	人骨１体	久が原台地の西側斜面地で発見された、「久ヶ原・根岸横穴墓群」に含まれる横穴墓。

要約	久が原台地の南西向き斜面地で横穴墓１基が発見された。墓道の具体的な構造は不明だが、墓室全長 2.14m、奥壁幅 2.0m、平面は半裁徳利形、断面はアーチ状を呈し、ローム土で墓室を閉塞していた。礫床及び死亡年齢 30 ～ 60 歳と推定される女性人骨１体が確認された。他に出土遺物はなく、詳細な構築年代は特定は難しいが、おおむね７世紀後半以降と考えられる。

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
久ヶ原遺跡（くがはらいせき）	東京都大田区久が原四丁目23番9号（とうきょうとおおたく くがはらよんちょうめ ばんごう）	13111	81	35°34′43″	139°41′40″	20141110～20141205	約 58.36 ㎡	個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久ヶ原遺跡	集落跡	弥生時代後期 中世	竪穴住居跡６軒 井戸跡１基	弥生土器 陶磁器（中世）	久ヶ原遺跡北限での弥生時代後期後半の竪穴住居跡検出及び中世井戸跡検出。

要約	弥生時代後期後半の竪穴住居跡６軒、弥生時代・古代の土坑２基、中世の井戸跡１基、近代の小穴を検出した。出土した主な遺物は遺構内・遺構外を含めて、弥生土器 122 点、須恵器１点、陶器５点、石器・礫 53 点である。

大田区の埋蔵文化財　第23集

南久が原二丁目４番横穴墓Ⅰ　久ヶ原遺跡Ⅵ
発掘調査報告

発行日　2017（平成29年）３月31日
発　行　大田区教育委員会
編　集　大田区教育委員会　大田図書館　文化財担当
〒143-0025　東京都大田区南馬込五丁目11番13号
（大田区立郷土博物館内）
TEL 03-3777-1281　FAX 03-3777-1283